

# 第貳章 八月 第二日曜日

## 説話 斬髪

今から思ひますと何でもないことですが、明治四年の八月九日に、斬髪廢刀の令が下りました。

髪を結つてゐる人は、どうでも散髪しなければならぬのです。その時小髪を短かく刈つてしまふと出家でもしたやうな氣がするので、若い人達はとりわけ困りました。今でも、折々髪を結つたお爺様があります。あれはみんなその時分の若い人達です。日本で最初に散髪をした人は横濱へ行つて、フランス人から兵式をならつてゐました。これが文久二年の話であります。ところがその時分は却つて、斬髪したといふ罪で、大目玉を頂戴して、七日の間は謹慎と云つて、ちつとしてゐなければなりませんでした。

又、廢刀のことは、武士の魂を持つてはならぬといふのは、どういふ譯だと云つて、氣の早い武士達は、この廢刀のことをやかましく唱へたお役人を殺さうとしたさうです。今から考へると前の斬髪の話も又この刀を指すことをやめたにした話も嘘のやうな馬鹿げたお話ですね。

## 佛の組 光陰を惜しめ

竹窓二筆に、「大禹は聖人にして寸陰を惜しめり。衆人は常に分陰を惜しむべし、一刹那一彈指の光陰をも惜しむべし。昔、伊菴權禪師は、晩に至り必ず涕を流して曰く、今日亦た、恁麼に空しく過ぐせりと。その勵精かくの如し。予はたゞ伊菴のこの語を憶うて、嘆息するのみ。而も未だ涕を流さず。即ち知る、予の古人に及ばざる遠きこと甚だしきを、愧ぢざるべけんや、勉めざるべけんや」と記してあります。

古人の光陰を惜しむことはこのやうに切實です。高祖大師様も又永平廣錄に、「古より有道の人は、國城男女、七寶百物を惜しまず、たゞ光陰を惜しむ、』と御示し下さつてあります。道を修める人は、寡慾で財物なんかは惜しみません、が唯、光陰のみはいたく惜しみます。かの白隱禪師は一生大刹にも住むことなく、清貧に甘んじた方であり、が光陰を惜しむことは甚だ切なるものが御座います。禪師二十三才の春、岡山の城下を通りました、其の時道伴れの道友等は、留まつて風光を

觀賞してゆかうと云ひ出して、禪師にもすゝめしました。然し禪師は黙つて之に加りません。皆んなは其の理由を尋ねました。すると禪師は、『我れ何の暇ありてか遊觀せん』とて、別れ行かれたと申します。活佛とまで世の人々に慕はれ、上下の渴仰の的と敬はれた禪師は、實に此のやうに寸陰を惜しまれて、刻苦勵精遊ばされた事を見逃してはなりません。

然しながら、光陰を惜しむことに其の度を過ぎて、寢食を廢すと云ふ様なことをするのには、いけません。『衣たらず、食たらず、睡眠たらずるは、これを三不足と名づくみな退惰の因縁なり』とは太祖大師の誨へ給ふ處であります。

實に光陰は私共の生命であります。一日の光陰は即ち一日の生命であり、一年の光陰は即ち一年の生命であります。光陰を空しくするは、即ち生命を空しくすることであります。

其の代り、若し私共が光陰を生かして用ふるならば、即ち時間を旨く利用するならば、それだけ私共の生命は延長するのです。凡人のなし得ない偉大な事業をなし得

た人は、それ丈、或は永久の生命を勝ち得たとも云ふべきです。

心して時間を利用せねばなりません。そうしてそれは一日を旨く利用するよりも、尙ほ一瞬を生かしなさい。

### 法の組 一番最初のお弟子

太子さまがお悟りになつて見ると、今までの考へはすつかり間違つてゐました。今まで違ふと思つてゐた、この世界(宇宙)と自己は結局同じものである、即ち自己は取りもなほさず宇宙であり、あの廣い涯のない宇宙は即ち自己であることが、はつきりとわかりました。

太子が眼をあげてあたりを御覽になると、今までは苦しみと憂の世界とのみ思つてゐた此の世が、今はそのまゝ楽しい極樂淨土と變りました。草木の上にも花の上にも光りがあり、吹く風は歡喜の聲をあげ、流るゝ水は永久のいのちをさゝやいてゐます。カピラエ城の太子悉達多は遂に芽出度、成等正覺して佛陀(ブダハ)覺者(眞理を

悟り究め得た者」となられたのであります。これから太子様と云ふかはりに佛陀と申上げることにいたします。

佛陀は大悟遊ばされてから三七日の間は、其處にあつて濁りで解脱の法悦を樂しんでゐられました。それから、罪と惱みにあへいでゐる世の人々を救ひ導く爲に靜かに思出深い菩提樹下の座を起つたのであります。第一にかのアララカラン、ウツタラマの二聖者の處へ行つて、彼等の考の間違つてゐることを説き聞かし、自分の得た眞理を傳へてやらう、とお思ひになつて、彼等の任んでゐるメーロ山に向はれました。ところが途中迄いらつしやつた時、もう彼等は二人とも死んでしまつて、この世にはゐないと云ふことを聞かれました。

そこで道を變へて鹿野苑に赴かれることになりました。鹿野苑は、さきに太子は墮落したと見捨て行つた五人の家の來のゐる所です。その途すがら五百人の商人の一隊に出逢はれました。その商人の頭の二人の者は佛陀の威容のある姿を拜して、尊敬の餘りミツセウと云ふ非常に滋養になる甘しい蜜を差上げました。佛陀は彼等のために

御説法をなさいました。これが佛陀の度し給ふ信者の最初の者であります。

鹿野苑に来て見ると、橋陣如等五人の家の來は今以て苦行を續けてゐます。遙かに佛陀の姿を見た彼等は、

「苦行を止してしまつて御馳走を貰つたりした人なんか相手にすまい。立つて迎へたりしないことは勿論、お辭儀一つしないことにしよう。」

と、さゝやき合つてゐました。

然し今の悉達多は昔しの悉達多ではなくして、宇宙の眞理を究めて無限の大法を得た佛陀となつてゐられる、その悲智圓滿の徳はあたりを拂ふばかりであります。佛陀が五人の前迄お出でになると、この偉大なるお姿に思はず五人の者は其の座を立つて丁寧にお辭儀をしてお迎へいたしました。そうして一人が御衣の塵を拂へば一人がお足を洗ひ、又一人は座をしつらへると云ふ様に、まるでさきの申合せを忘れたかのやうにもてなしました。

そこで佛陀は五人の者の爲めに親しく、委しく道を説き聞かせられましたから、五

人は始めて夢から覺めたやうに多年の邪見を悔ひ改めて、佛陀最初の弟子となりました。

こゝに於て佛・法・僧の三寶が始めて具足したのであります。

佛陀は此處で約三ヶ月の間止まつて、五人のものを始め土地の長者の子耶舎と其の家族を教化し、續いて五十幾人の者を救ひ導かれました。

耶舎については次の日曜日にお話いたします。

### 僧の組 法然上人

勢至丸は信仰深い時國と云ふお土をお父様に、情深いお母様をもつて幸福に成長してゐました。

この勢至丸はお母様が、ドキ／＼と光る剃刀をお腹の中へ呑み込んだ夢を見てから生れたのです、それでお父様もそれはきつと今に偉い御坊さんになるに違ひないと言つてゐられました。その通り驚く許りの賢さで何を教へても一を聞いて十を知ると云

ふ具合でありました。

勢至丸九才の或晩私に恨をいだいてゐた定明と云ふ土が大せいの家來をつれて不意に勢至丸の家を襲ひました。お父様は負傷し家の者は不意のことゝて皆逃してしまひました、けれども勢至丸は小さい弓矢で藪の中から敵を射ました、すると夫が正しく定明の眉間に中つたので定明は逃げ歸りました。

この勇ましい働が評判となつて勢至丸のことを小兒矢丸と人々は呼ぶ様になりました。

けれどもお父様はその創がもとでとう／＼なくなりました、その前に、枕元に勢至丸を呼んで

『決してお前は仇をうらみ仇を討たうなど、考へてはいけません。その代りにお前が大きくなりましたなれば、悪い人を善人にたちかへらしてお浄土へ導いてやることを考へなさい』と言つてしづかに目をつむられました。

勢至丸始め皆の歎きはどんなであつたでせう。今やお父様に孝行をすると云へばあ

の御遺言を守るより外はないと考へた勢至丸は、叔父様の觀覺法師様の御弟子となりました、之は勢至丸九才の七月でありました。

十三の時から比叡山に上つて一層夜もねない程に勉強しました。十八の時師の叡空上人は『御房は實に法然具足の人だ』とて法然房源空と名づけられました。人も及ばぬ修業の結果『智惠第一』とまで言はれてゐました。敦盛を討つた熊谷も遂に上人の御弟子となりました。之は今から七百六七十一年前の事です。

## 第參章 八月 第三日曜日

### 説話 盆燈籠

お寺のお堂の中に、赤や淺黄のだんだらのキリコ燈籠がつり下げられて、楽しいお盆になりました。

日本で盆のお勤をしましたのは、齊明天皇の三年秋七月十五日に、飛鳥寺といふお寺の西へ、須彌山の模型を作つて、盂蘭盆會をお催しになつたのがはじめです。けれどもこれは朝廷だけのことで、誰でもこれが出来るやうになつたのは聖武天皇の天平五年からです。盆の十五日に燈籠をとすやうになつたのは、それからすつと後後堀河天皇の寛喜の時分からださうです。

佛法僧合級

お盆のはじまり

御釋迦様の御弟子の中でも『神通第一』と云ふ法力を持つてゐる人は目連尊者様です。この目連尊者のお父様は大變善い人でしたが御母様は非常なけちん坊で、なんでも人のものを欲しがり、そのくせ人には塵一本でもくれるのを嫌がる人でした。それ故お父様は極樂へ生れかほりましたがお母様は餓鬼道へ生れかほつて、毎日／＼ひもじい思ひをしつゝまだそのト鬼にせめられて、来る日も／＼苦しんでゐました。

目連尊者様は神通力が御上手になつたので一度御母様は何處へ生れかほられたか知りたいたと神通力で諸所方々を御覽になつてゐると今日も亦鬼にいちめられてゐるのでした。

尊者はびつくり遊ばして直ぐに其所へ行き鬼を追ひ拂ひました。お母様は今までに御飯も別にいたげない哀れな餓鬼になつてゐられるので『まあ何と云ふ悲しい御姿でせう！どうかこの御飯を召上つて其の飢を御凌ぎ下さい』と御飯をお母様に差上げ

ました。お母様は喜んでこれを食べ様とすると、これはまた不思議、お椀の御飯は火となつてポツと燃えてなくなつて終ひました。

これはとても目連様一人では餓鬼になつてゐる御母様は救はれません。尊者は直ぐに御釋迦様に『お母様をどうか救ふ道を教へて下さい』と御願ひしました。

目連尊者は御釋迦様に教へられた通り、あまたの御弟子達の力を借り御釋迦様に『施餓鬼供養』と云ふ法を行つて戴き遂にお母様を始め、おほくの餓鬼道に落ちてゐる人達の苦しみを救ひ極樂世界に助けあげたのであります。その日が丁度七月十五日でありました。それからこれがお盆のはじまりであります。

## 第四章 八月 第四日曜日

### 説話 河の水

或る若者が、朝早くから遠い路を歩きました。暑い／＼夏の日に歩いたので喉はから／＼に渴いて、息も出来ないくらゐになりました。若者は、何處かに水がないかと、方々さがし歩いた末、やつとすることに大きな河の側へ出ました。河には水が一杯いになつて流れてゐましたが、若者は何を思つてか河の水を見ると急にしく／＼泣き出しました。

すると、その側を通つた人が、若者の泣いてゐるのを見て屹度身投げをするのに違ひないと思つて、

『もし／＼、どんな譯だか知りませんが、死ななくてもい／＼じやありませんか。』と云ひました。若者は不審さうな顔つきで、

『いえ、死なうと思つて居るのではありません。』

『では、何を泣いてゐらつしやるんです、河へ何かお落しなすたんですか？』

『いえ、何も落しません。私は大そう喉が渴いて困つてゐるのです。』

『喉が渴くのなら、この河の水を飲めばい／＼じやありませんか。』

『だつてあなた、こんな澤山な水が、どうして飲み干せるものですか。』

かう言つて若者は、また泣き出しました。世の中にこんな馬鹿者は滅多にありません。けれども、これに似た馬鹿者は随分あります。偉い人が澤山あるから、自分はとも偉い者にはなれないと言つて遊んでゐる人は、これと同じです。書物の紙数の多いのに驚いて、ちつとも本を見ないのも矢張りさうです。

### 佛法僧合級 地藏祭り

劇、お伽話、音楽、唱歌、遊戯等それ／＼趣向

### 首なし地藏

皆さん！

兄弟けんかをしてゐる程見にくいものはありませんね、

その代りまた兄弟が仲よく睦まじく互に助け合つてゐる程美しいものはございません

東京の町から四十里許り南鋸山と云ふ山の中腹に日本寺と云ふお寺があります。この寺から鋸山の頂迄に八十八の御地藏様が立つてゐますが、其の中でたつた一つだけ首の無いお地藏様があります。

この首のないお地藏様だつて矢張り始めは立派に首があつたのです。けれどもそれが首無し地藏になつたには深い美しいわけがあります。

今から五十年許り昔、この山の麓に小さい時にお父様をなくしたお澄と大三と言ふ二人の兄弟がお母様と三人で淋しくはあるが楽しく暮してゐました。處がまたお母様もフトした病氣から續いて逝くなられました。

二人は大層悲しみました。

それから後は、二人で山で薪を取つては村に出てお錢とかへて細い生活をしてゐました。

二人の働きは非常なものでありました。その爲に姉様は遂々病氣になりました。

大三の心配は一通りではありません、一入姉思ひの大三は夜もねないで世話をしま

した。けれども、ひどい熱にうかされて時々うは言を言ひます。

「あゝお母様に會ひたい、お母様に會ひたい」このうは言を聞く度に大三もお母様の事を思ひ出しては、言ひ知れの悲しさをいただくのでした。何か珍らしいものでも食べたいと言ふのなればどうにかしてゝもあげる事も出来様が、逝くなつたお母様にはどんな偉い方でも會はして下さる方はない、どうしたらよからうと大三は途方にくれました。

フト思ひだしたのはいつかお母様が話して下さつたお地藏様のお話しです。

左様だお地藏様にお願ひしようとお山へ登つて御地藏様に

「何卒姉様の御病氣を直して下さい」と熱心にお願ひいたしました。そうして、フト見ると日頃忘れた事のない死んだお母様とそっくりな地藏様が目につきました。それと同時に頭に浮んだのは姉様がお母様に會ひたい、お母様に會ひたいと言つてゐた事です。左様だ！

「この御地藏様の首を姉様に見せたら」と考へました。さうして御祈りをしてはお地



藏様の首をゆすつて見るのでした。けれども石で造られてあるお地藏様の首は子供の大三にはどうすることも出来ません。けれどもお母様がよく仰せられた「精神一到何事かならざらん」心をこめて一生懸命にやればどんな事でも出来ない事は無い。私も毎晩誠心をこめて首を取らう」と決心しました。

毎晩〱御祈りに来ては動かして見るのでした。

丁年五日目の晩「今晚こそは」と全身に力を入れてウンと押ししました。すると意外〱お地藏様の首はコロリと落ちました。遂に大三の誠心は通じたのです。大三の喜びはどんなであつたでせう。

このお地藏様の首を小脇にかゝへて大三は一生懸命にお家の方へ駈出しました。余りの嬉しさに夢中で走つてゐた大三は石につまづいて倒れました。其の時大切に抱へてゐたお地藏様の首を取落しました。お地藏様の首はコロ〱とところがつて深い〱谷へ落ちて終ひました。聖いお地藏様のお首を取つた大三の行ひは決して立派な行ひではなかつたのです。それですから首は大三から去つて深い谷の中へ落ちて終つ

たのです。

けれどもこの大三の姉思ひの誠心は御慈悲深いお地藏様に通じて、其の御地藏様の御利益で目出度くも姉様の病氣はすっかり癒りました。

大三の誠心で御病氣のよくなつた姉様は大三の手を取つて嬉し泣きに泣きました。

この事が村中に傳はるとこの大三の美しい心掛や行ひを後の人々に知らす爲めに、わざと首をつけないで置く事になつたのです。それで只今でも首なし地藏と言つて誰知らぬ者もない位有名になつてゐるのです。(大塚實演お話集から)

# 第五章 八月 第五日曜日

## 説話 天長節

このおめでたい日に畏くも今上天皇陛下のお若い時分のおえらかつたお話を致しませう。まだ皇太子殿下でお在になつた時分のことです。

ある寒い朝でした。お付き武官が椅子にかけて書物を讀んでをりましたが、あまり足が冷いので小さな炬燵を脚の下へ置いて居ました。ところへ、殿下がふいにおいでになりました。武官はびつくりして、ツツと立つて、敬禮をいたしました。殿下は、につこりお笑ひになつて、

「今日は大さう寒いのう。」と仰ひました。

「軍人は、寒いか暑いかは申さないものでふいます。武官はかう申上げて脚をもぢくして居りました。

殿下は、またにつこりお笑ひになつて、そのまゝ學習院へおいでになりましたが、學習院では、寒さのお障りがあつてはいけないと思つて、殿下のお椅子の下へ火を容れて置きました。

殿下は、「軍人は、寒い暑いと言はないものだ。」と仰つて、すぐその火をお除けになりました。

このことを聞いた武官は、恐れ入つて、お詫びの言葉がなかつたといふことです。

## 佛の組 禮讓

禮讓とは禮節、謙讓と云ふことであります。自分を謙下して人を尊ぶ、これを謙讓といひ、儀禮のよろしきに適ふのを禮節と申します。

私共は自重して、その信じてゐる所を守り、能く佛子たる品位を辱めてはならない。と言つて、猥りに慢心して人を侮つてはなりません。月舟夜話に「學道は常に謙下の心を生じて、一切を恭敬するの外に別の用心なし。」と述べてあります。

私共は、自分が何かに少しでも人に勝れた點がある時に、えてして慢心を生じ易いものです。唐に法達といふ者がありました。出家學道の後、曹溪大師に參じてゐましたが、彼は法華經に通達してゐた所から、慢心を起して、作法錦密でなく、威儀禮

節に戻るものがありました。曹溪大師は或日これを阿責して、

『禮をした時頭の地につかない様な禮なれば、禮したもしないも同じだ。汝の心中に必ず一物を藏して居るからだ。』

と痛くその非禮を誡められました。

禮節はもと自他の品位、人格を敬愛し尊重するもので、之に依つて交際の親密は保たれ、社會の秩序は維持されるのです。若しも禮節と云ふものが無いと假定するならば、私共は何に依つて人を尊重することを表示し、又社會の善良な秩序を保持することが出来ませう。

世には虚禮虚儀の廢止を叫びて、一般の禮節をも無しにせんとするものがあります。成程虚禮虚儀の改善は首肯すべきであります。時と所と人にと適應する禮節を嚴守することは、私等の務めであります。

先徳の言葉に

『威儀即佛法、作法是宗旨』

とあります。佛子たる私共は、少くとも世人より一步進んで禮讓の實行者であらねばなりません。

### 法の組 耶舎のめざめ

耶舎は長者善覺の子であります。幾萬ともしれぬ財産がある長者の家では贅澤の過ぎりをつくしてゐました。だんぐり成人して來るに隨つて其の様な浮調子な生活が厭はしくなつてきて、或夜ひそかに家をぬけ出しました。別に行くべきあてのない耶舎はあちらこちらとさまよつた末、曉方に至つて鹿野苑にきてゐました。

丁度此の朝、佛陀は早起きをして苑内を散歩してゐられました。この佛陀の嚴かた然かも慈愛に満ちた麗しい御容貌を拜した耶舎は、思はず知らず佛陀の御足下に身をひれ伏して、

『どうぞ、私をお救ひ下さい。』

と、切ない惱みをこの一言に、誠心こめて願ひました。

佛陀はこのいじらしい耶舎のために尊い御教へを懇ろに説き聞かされたので、耶舎は今迄のふしだらな生活が今更ながら無意義であつたことを知つて、遂に無上道をかざることが出来ました。そうして佛陀のお許しを得て、緑の黒髪を剪り、立派な衣服を袈裟と脱ぎかへて、御弟子の一人となりました。あはれ長者の一人息子として思ひのまゝの生活をしてきた耶舎も、今は一介の染衣をまとふ沙門とはなつたのであります。

耶舎の父母は耶舎の姿が見えないのでびつくりして、大勢の召使を四方八方に走らせて耶舎を探らせました。けれども更に手がかりがありません。お父様はじつとしておられず、自ら鹿野苑の方へ尋ねて行きました。すると鹿野苑の入口で耶舎の常にはく靴を發見しましたから必ず苑内に居るに違ひないと喜んで内へ進みました。佛陀は耶舎の父の尋ねて来たことをお知りになつて、若しその子の出家姿を見たならばどんなにか、がっかりすることであらうとお考へになり、先づ耶舎をお隠しになりました。そうして佛陀は優しいお言葉で、耶舎に聞かせたと同じやう法を説き聽かされまし

た。有難い御教を聞いた老人は法悦の樂しきにお弟子に加へて下さいと願ひました。佛陀は其の志を嘉させ給ひ、俗弟子とし、三歸戒をお授けになりました。この善覺老人が優婆塞と云つて、俗人のまゝで佛弟子となるものゝ始めであります。耶舎父子が、佛陀の信仰に生きてゐることを知つて、耶舎の友達は非常に羨ましがつて續々として出家し、遂に五十幾人もの耶舎の友人は全部出家して、佛道に精進するやうになりました。

今や佛陀は六十人からの御弟子衆が出来ましたから、一同の人々をお集めになつて「お前達はもう既に修行が出来たから、他の人々を教へ導かねばならない。これから總ての方面に別れて、教を傳へ、慈愛の心を以て苦しんでゐる人々を救ふやう心がけよ。我も又ひとりにてマカタ國に行き其の地の衆生を教へ導くであらう。」と仰せられて、總てのお弟子達を各地方に派して教を傳へさせられました。

### 僧の組 傳教大師

今から一千五十年餘り前、近江の琵琶湖の邊、後には比叡のお山が高くそびへ前には琵琶湖の澄みきつた水を望んだそれはく景色のよい三津の浦に百枝と申される首様（地頭）がありました。

永いこと御子さまがないので夏の暑い日もあの冬の身も凍るやうな寒空にも日毎に比叡の山の御薬師様に男の子を授かる様にお願ひしました。

その熱心に遂にお薬師様は子供をお授けになりました。丁度翌年の八月十八日に首様の奥方は玉の様な男の子を生みました。

不思議なことにはその赤ちやんは兩手を堅く組んで何にか握つてゐる様なので徐かにかいて見ると、其の中には白銀の薬師如來の御像がありました。喜んだのは首様夫婦丈ではありません、村人も首様は御信心家であるからその子は佛様の生れ代りだ有難いことだと喜びました。そうして赤ちやんの名を廣野さんとつけました。

この廣野さんは大きくなるほど賢くなり四才位の時から立派に読み書きが出来ました。十二の時自分から御願ひして御坊さんになりました、そうして名前を最澄と改め一生懸命に勉強されました。

十九の御年今一層深く修業するには人の行かない寂しい所でなければならぬと考へました。そうして寂しい所を求める爲に比叡山へ登つて行きました。すると一人の童子に會ひましたので聞きました。

すると童子は

『この山は火にも焼けないし水にも汚されない尊い山です』と答へて姿は見えなくなりました。そこで最澄はこの淨い静かな比叡山で三十近くまでも専心に修業せられましたからもうその頃では日本一のえらいお坊さんになりました。そうして桓武天皇から宮城のお守をするやうと仰せられました。

最澄上人様はかうして日本一のお坊さんに出世しましたが尙支那へも渡りて一層お徳をつんで歸られました。此方が大師の始りです。

第六篇 九月の分

第六篇 九月の分

## 第一章 九月 第一日 曜日

### 説話 始業式

長い〜夏休みもとう〜済みました。

學校から云ひつけた宿題は出来て居ますか、ご本を失つたりなんかした人はありませんか。學校が休暇になる前、先生は皆に休み中の心得として、生水を飲まぬこと、朝起きをすること、朝の涼しい間によく復習することなどを幾度も〜繰り返して仰ひましたね。

これらの御話にそむかぬ様に皆様は休暇中を、よく勉強なさつたことでせうね、さア之からは勉強するのに最もよい季節になりますから一つ大車論をかけませう。

### 汽 車

日本に一番始め汽車が敷かれたのは明治二年に横濱の燈臺寮から裁判所までの僅か七町間に敷かれた鐵道ださうですが、ほんとうの汽車らしくなつたのは明治五年に敷かれた京濱鐵道です。今でも山國には汽車を知らない人があると云ふことですが、

その時分は餘程汽車がめづらしかつたもので、これを見に、わざ／＼遠い處から出かけて行く人がありました。

そしておかしいのは、その頃は汽車のことを陸蒸氣と言つたんださうです。『陸蒸氣がヒューヒュッ』といふ歌が流行してゐたといふ話です。

又『汽車ちゆうものはこんなものか、素的に足が早いもんだね。』など田舎人がほめてゐたこともあるさうです。

何にしても今と昔とは随分世の中が變つてゐます。

### 佛の組 慈悲

前回にお話した同情の美德に、理知の光を加へたものを、慈悲と言ひます。例へば此處に不幸な女がある、これを憐みて、財物をこれに施與するのは、同情の行であります。更にこれを策勵して、自由獨立の氣象を養はし、將來堅實な生活を營ますと云ふのが即ち慈悲の行であります。

涅槃經に『人多くの子あり。その中の一人、病に臥す。父母の子を愛する、平等ならざるにあらずと雖も、然も病子には心偏に厚し、如來も亦然なす。諸の衆生に

於て、平等ならざるにあらざれども、然も迷執あるものに、心偏に厚し、』と御示し下さつてあります。御佛様の私共を御憐愍下さることは、この様に厚いのであります。私共御佛の道に勵むものとして、如何して佛心に倣はずにゐられませう。

觀音玄義に曰く、『感傷を悲と名づけ、愛念を慈と名づく、感傷して苦を抜き、愛念して樂を興ふ』と。人の苦海に沈淪するを憐み、人の善根を増長するを歡び、廣く動物を愛撫し、植物を保護して、その善性を發揚せしむるのは、實に佛心にかなるものであります。

優婆塞戒經に、『慈悲を離れて、善法を得ることなし。』と喝破されてある通り慈悲は誠にこれ一切善行の根本であります。



### 法の組 佛陀と毒蛇と三迦葉

佛陀は六十人からの御弟子を傳導の爲に四方につかはしてから、さきにマカダ國王のピンバサーラ王と約束したことを果すために、自らマカダ國の王舎城へ向はれられた。

途中、尼蓮禪河の畔、苦行林に來た時、この附近に優婁頻螺迦葉（ウルヴァイラ、カシユヤバ）、那提迦葉（ナデー、カシユヤバ）、伽耶迦葉（ガヤー、カシユヤバ）、の三人の兄弟が有名な事火婆羅門の教主の三迦葉と云はれて住んでゐることを聞きました。彼等は婆羅門の大哲學者で、國王始め國中の人々が皆んな尊敬してゐる智者でありましたが、一方なか／＼我慢が強く、人の言葉などには容易に服さないと云ふ難物でした。

佛陀はまづ此の様な人物から教化しやうと、一番兄の優婁頻螺迦葉を訪ひ一夜の宿を頼まりました。すると迦葉は彼等兄弟三人の他は誰もはいることの出來ない毒龍（

毒蛇）の住む石屋に導いて、

『他の室は皆んなふさがつてゐますが、この石屋ならば空いてゐます。然し困ることは毒蛇が住んでゐること、若しかすると害をするかもしれない。それでも御承知ならはお貸し致しませう。』

との意地悪い言葉です。然し佛陀は平然として、

『それでは御借りいたします。』

と靜かに其の石屋の中に入つて其の一夜を過されました。皆さん、毒蛇は我が佛陀を傷けたでせうか。否々全世界の父であり衆生の師である佛陀には、いかなる者がいかなる物を以てするとも害をあたへることは出來ません。

其の夜、毒蛇は人の氣はいがするので忽ち毒心を起して體全體から毒焰を出して一口に佛陀を呑んで仕舞はうと致しました。佛陀はそこで火光三昧に入つて其の焰より力い焰を發せられました。毒蛇も益々毒焰を吐いて大いに争ひ、遂に石屋中が一ばい火になり其の焰は夜の闇を破りました。これを見た迦葉は『可愛想に若い出家は殺さ

れた。』と云つて急いで弟子たちに水を注ぎかけさしました。がそんな水位で消えるやうな火でありません。皆んなで可愛想なことだと言ひ合つてゐました。

處が翌朝になると殺された筈の佛陀は健やかで、而かも恐るべき毒蛇を鉢の中に入れてゐます。

『いかなる害をなすものも、自分の心さへ清浄であれば外からの災などは絶対に受けぬものです。恐るべき毒龍も既に降服して三歸を授けましたから、この通りおとなしくなりました。』

と佛陀は迦葉始め一同の者に示しました。見ると今まで皆んなの恐れてゐた大きな毒龍は傍らの鉢の中で小さくわだかまつてゐるではありませんか。さすがの迦葉も弟子の者もこの佛陀の神通には驚きおそれました。然しまだ慢心の強い迦葉は御弟子にならうとはしませんでした。

其の後佛陀は折にふれ機にふれて、斯様な不思議な神通をあらはし遂に優婁頻螺迦葉をお弟子になさいました。迦葉が御弟子になつたので五百人の弟子達もまた迦葉と

同じく御弟子となつて佛の道にいそしみました。長兄の改宗を知つた那提迦葉も、伽耶迦葉も各々三百人乃至二百人の弟子と俱に今迄の信仰をすて、佛弟子となりました。今や佛陀は千數百人の御弟子が出来たのです。

### 僧の組 自ら生ける者を殺せば殺生の罪あり

(正法念處經)

昔印度に毎日々々生きものゝ肉をたべないと辛抱の出来ないといふ厄介な人がありました。

生きものをさうむぎ／＼殺すのは悪いことだといふことは、克く知つてゐましたから、この人は

『家の裏にある大木には尊い神様がいらつしやる、その神様には毎日新しい羊をお供せねばなりません』

と言つては、たくさん飼つてある羊を毎日一匹づゝ御供へしました。そうして『お

下りは私が戴くのだ』と言つて其の羊を殺してたべてゐました。

ところが此の人はふとした病氣から死んで終ひました。

すると此の人は生きものを殺した報でこんどは自分がその家の羊に生れました。

けれどもそんなことを少しも知らない息子たちはお父様のしてゐた通り、毎日々々一匹づゝの羊を殺してゐました。そうして今日そのお父様の羊の番になりました。

お父様の羊は涙をポロ／＼こぼして、『私はおまへたちの親の生れ變りだ、私が生き

てゐたとき羊がたべたいばかりに皆の人を騙してゐたのだ、その罰で私はとう／＼

羊になつたのだ。どうか命ばかりは助けてくれ』と云ひました。

## 第貳章 九月 第二日曜日

### 説話 汽車

日本に一番始め汽車が敷かれたのは明治二年に横濱の燈臺寮から裁判所までの僅か七町間に敷かれた鐵道ださうですが、ほんとうの汽車らしくなつたのは明治五年に敷かれた京濱鐵道です。今でも山國には汽車を知らない人があると云ふことですが、その時分は餘程汽車がめづらしかつたもので、これを見に、わざわざ遠い處から出て行く人がありました。

そしておかしいのは、その頃は汽車のことを陸蒸氣と言つたんださうです。『陸蒸氣がヒューヒュー』といふ歌が流行してゐたといふ話です。

又た、『汽車ちゆうものはこんなものか、素的に足が早いもんだね。』など田舎人がほめてゐたこともあるさうです。

何にしても今と昔とは随分世の中が變つてゐます。

佛の組 同情

黄檗の鐵眼和尚と申す方は、あの大藏經刊行の大事業を全うした高僧であります。其の志を立て、十餘年間の長い間、或は淨財の勸募に、或は印房の督勵に、寢食を忘れて心をこの事にのみ注いでゐました。其の熱誠さは筆や言葉ではつくされません。處が偶々大阪に大洪水があつて、罹災者の窮乏の甚しさを、和尚は之を默視するにしのびず、遂に長日月を費して漸く得てゐた大藏經刻藏の資を擧げて、之を施與してその急を救ひました。そうしてこの後また長い月日、刻苦して再び資金を募つて遂にこの大事業を完成したのです。この畢生の大業をいとなむその大切な資金をおし氣もなく施與した其の同情の深き、誠に常人のなし得ない美學であります。又有名な東坡居士が、我土地を購ひました。そうして其の夜、月明りで氣持のよいまゝ、散歩してゐました。處が其の途中、一老嫗が泣きながら其の子に言つてゐます『お前が、不肖なからして、父祖傳來の地所を失つて終つた。祖先に對して申譯のな

いことをしでかしたものだ。』

其の土地と云ふのは、東坡が今日買つたものです。東坡は之を知つて、同情に堪へず早速、證券を破棄して、その土地を老嫗に與へたと申します。

佛家に行ふ放生會も、之の同情のあらはれです。魚や鳥の數限りなく害はるゝのを坐視するに忍びず、温い同情をもつて、方便してこれを救ふと云ふのが、放生の本義であります。一部の人は誤解して自分が長生きしたい爲めに放生するのは、放生の精神に合致いたしません。

同情は人の美德であつて、佛心自然の發露であります。憂ある時は憂を、悲ある時は悲を共に願つは、佛心に隨ふわけであります。御佛様は私共の憂き悲み苦しみを御自身の憂き悲しみ苦しみとして下さいます。

佛子である私共として、どうしてこの御佛様の御心を倣はないでいられますやう。

法の組 竹林精舎

一千人からの御弟子の出来た佛陀はこれ等の者を引きつれてマカダ國の都、王舎城へお入りになりました。當時有名な聖者であつた三迦葉をも弟子にしてゐられる徳の高い佛陀を拜もうと、王舎城は大變な賑ひでありました。國王ビンバサーラ王も多くの家來達に取まかれて、佛陀の許に来て幾萬の群衆と共に佛陀の説法を聞かれました。順を逐つて懇ろに説かれる佛陀の教へを聴いて群衆は感激せずにはゐられませんでした。殊にビンバサーラ王は大いに心を動かされ、

『あゝ偉大なる佛陀、優れ給ふ世尊！あだかも倒れたるものを起し、蔽はれたるものを顯し、迷へるものに道を示し、眼あるものが物の形を見得るやうに闇に光を持ち運んで來るやうに、世尊はさまじく道を示し下さいました。朕も多年の迷ひの雲が晴れた心地がします。世尊よ、私は世尊と法と僧伽の三寶に歸依し奉ります。今より命の終るまで優婆塞（男の信者）として下さい。』

と願つて、佛陀の御弟子になりました。

其の翌日佛陀は又も集つて來た群衆に御法要を説き給ひ、正午頃ビンバサーラ王の御請待に應じて王宮へ赴かれました。其の時佛陀の徳をしたふ群衆は幾千人ともしれず王宮までもついでに申します。佛陀の感化力の偉大さ！驚くべきではありませんか。

王は佛陀を歡喜に充ちて迎へて、王自ら給仕して佛陀に食を奉りました。佛陀始め弟子達のお供養のすんでから、王は佛陀の御住ひになる所を何處に定めやうかとお考へになりました。町からの往復に便利な遠からぬ土地で、而かも静坐の妨げとならない静かな所であればなりません。色々お考へへの結果、それにはこの國の樂園である竹林園（ヴェールヴァーナ）が一番應しいとお思ひになり之をさしあげやうと決心して、佛陀にお許しを乞ひました。佛陀のお許しを得ると王は早速、其處に立派な伽藍を建て、佛陀を始めお弟子達の住居にあてられました。之が有名な竹林精舎と申して佛陀最初の精舎であります。佛陀は傳道にゆかれない雨期は、ずつと此處で過され

ました。又一番多くこゝで説話遊ばされました。

### 僧の組 聖應大師

聖應大師様御幼名を音徳丸と申しました。音徳丸三つ四つになると、土で御佛様のお像をこしらえては拜んでゐました。そうして其の賢いこと、皆んな驚くばかりでした。御佛様を拜むことのすきな音徳丸は十二才の時是非共出家したいと云ふので比叡山の良賀大僧都の御弟子になさいました。けれども可愛い音徳丸に出家させたので御両親は力を落して終ひました。それを音徳丸は慰めて

「これから御師匠さんの仰やることをよく守つて、きつと立派なお坊さんになりますから、どうかそんなにお力を落さずに待つてゐて下さい」と申しました。

比叡山に行つてから良忍と云ふお坊さんになりました。それから夜に日について勉強したおかげで良忍二十一才の時には若い年ながら名譽ある比叡山の講主となつて多くのお坊さんに御講義をするやうになりました。

良忍二十三才のとき講主をやめになり大原と云ふ所に來迎院と云ふお寺を建てて御年四十六才の時まで更に一心に御修業なさいました。其の年修業三昧に入つて居られますと目のあたり阿彌陀様が現れて融通念佛の奥義を御傳へになりました。

遂に良忍の多年の祈願がかなつたのです。良忍の喜びはたいへんなものでした。阿彌陀如來様から融通念佛の眞の道をお授かりになりましたから、こゝに良忍は融通念佛宗をお開きになりました。そうして廣く世の人々に道をお説きになりました。

鳥羽上皇様も良忍に御歸依になり毎日御用ゐになつてゐた鏡を叩き鐘になほして良忍に賜つた程でありました。

良忍は融通念佛宗を開かれた一方に梵唄と云ふものも立派に修練せられました。其の清らかな音聲を聞くと空飛ぶ鳥もお池の魚もきゝほれたと申します。

後桃園天皇は良忍上人の徳をしたひ給ひ聖應大師と云ふ大師號を謚られました。

## 第參章 九月 第三日曜日

### 説話 加賀千代

千代女は生れつき俳句が大へん好きでした。ある時俳句の名人である廬元坊といふ人が、千代女の住んでゐる松任といふ所へこられましたので、早速その旅舎へ訪ねて行きました。そして、いろ／＼と先生にお教へを願ひたいと申しますと、先生は、それでは時鳥といふ題で一つやつて御覽といひました。

千代はすぐ筆をとつて、さら／＼と書いて、廬元坊の前へおそる／＼差出しましたすると先生は笑つて、

『わざ／＼訪ねて来て修養したいと言ふから、どんなに上手かと思つたら、これはまるで素人だ、どうれ、もう一つやつて御覽』と言ひました。

千代は眞つ赤な顔をして、又一句作りました。けれども廬元坊はまだいけないと言つて、馬鹿にしてゐます。もう一句／＼と作りましたが、ちつとも氣に入りません。そのうちに廬元坊はグ／＼寐てしまひました。それでも千代は一生懸命ですから、枕もとに、ちつと坐つて幾度も／＼作り直してみました。

そうしてゐる間に雞が鳴いて東の空が白みました。廬元坊は吃驚したやうに起き上つて、『どうだい名句が出来たかい？』と言ひますと、千代は

時鳥々々としてあけにけり。

と答へました。廬元坊は、ボンと膝を叩いて、『を、天晴の名句ぢや』と言つて大そう褒めました。

それからますます／＼千代の名は高くなりました。

破る兒のなくて障子の寒さかな。

根は切れて極樂にあり枯尾花。

髪を結ふ手のひまあけて炬燵かな。

月を見てわれは此世をかしくかな。

佛の組 愛 語

高祖大師の仰せらるゝには、

『愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり。慈念衆生猶如赤子の懷を貯へて、言語をするは愛語なり。』と。

實際言葉は古聖の深く誠め給ふ處であります。旨く用ふれば之程調法なものはなく、悪用すれば、之程害をなすものはありません。

古歌に『三寸の舌で五尺のからだをば

とあります。 やしなひもする失ひもする。

支那春秋戰國時代、趙の國に廉頗將軍、藺相如の二人の英雄がありました。廉頗將軍は藺相如が後進の身を以て名聲高く、且つ位も遂に自分に超えたので非常に之を惡み、何日か之を取控いてくれやうと思つてゐました。一方藺相如は之の廉頗將軍の胸

中を知つて、以後若し途中で將軍に遇ふ様なことがあれば、必ず自分から道を避けてゐました。それで他の人々はこの藺相如の行爲を見て藺相如は必ず廉頗將軍を恐れてゐるに違ひないと嘲ひました。

此時、藺相如は云ひました。『餘不肖なりと雖も豈廉頗將軍を恐れんや、今や我國弱少にして而も強國の間に介在し、殊に強秦の侮りを受けざるものは、餘と將軍とあるが爲めなり。若し兩人相争は如何にして、我國の獨立を保つことを得ん。余は是れを以て避くるのみ。』と、廉頗將軍後に此の言葉を聞いて大いに自分の非を後悔し、其の罪を藺相如に謝して遂に斷金の友となり、趙の國を泰山の安きに置きました。之は左の高祖大師の御言葉の中の面はずして愛語を聞く云々の適例であります。誠に偉大なる力ではありませんか。

『徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむる事、愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を樂しくす。面はずして愛語を聞くは、肝に銘じ、魂に銘ず。愛語能く回天の力あることを學すべき



なり』

愛語の力はこの様に偉大なものでありますが、こゝに注意せねばならぬことは、只だ口先許りで、御上手を云ふのでは決してありません。高祖大師様の仰せの通り、心からの愛しむ言葉でなければならぬのです。換言すれば、慈念すること、恰も父母の赤子を懐ふ様であらねばならないのであります。

私共は日常、兎角何かにつけて、少しのことに腹を立て、は荒々しく罵つたり、面に向つては仲よくしてゐる様でも、蔭へ廻ると互に蔭口の言ひ合ひを、えてしてしたがるものです。慎しまねばなりません。

皆様、私共は御佛様を父としてゐる處の、一つの大きな法の家庭に於ける兄弟であります。同胞です、せめては、かうして日躍學校に来てゐる私共から、この高祖大師様の御示し下さつた愛語を完全に實行いたしませう。心からなる愛語の喜びを味ひませう。

## 法の組 舍利弗と目連

佛陀が竹林精舎においでになる頃、同じマカダ國に佛陀の教へと異つたバラモンの教へを學んでゐる舍利弗、目連と呼ぶ二人の立派な方がありまして、二人とも百人餘りの弟子をつれてゐました。けれども、未だほんとうの悟りを開くことが出来ない二人は、心の落付が得られません。そこで二人は相談をして、「若し二人のうちどちらかが、悟りを開くか又は善い師にめぐり遇ふことが出来たならば、互に教へ合はう。」と約束をしました。

ある日のこと、舍利弗が王舎城に行くと、氣高いそうして何處となく落付きのある立派な佛弟子に出會ひました。この佛弟子といふのは、鹿野苑で一番最初に御弟子になつた五比丘の一人で澤山の御弟子中威儀の正しいので有名な馬勝（若くは阿説示アツサヂ）であつたのです。

久しい間、誠の通を得たいと望んでゐた舍利弗は、馬勝のこの安らかな威儀のある

ものごし顔容を見て、心から恭敬の念を起して、「あゝ何といふ氣高い姿であらう！世に若し覺りを得た人があるならば、この方は確かに其の一人であらねばならぬ。」とおもひ遂に、

「友よ、あなたのお身體は誠に静けさに満ち、清らかに澄みきつてゐます。あなたは誰方を師匠としてゐられますか。」  
と馬勝に尋ねかけました。

「友よ、今釋迦の一族から出家して大沙門となつた佛陀の教へを私は奉じてゐます。」  
「して何の様にお教へになりまするか。」

「極く簡單に申しますると、『法は因縁によつて生まれ、因縁によつて滅ぶ』と云ふことをお説き遊ばします。『賢明い舍利弗は、この簡單な言葉に依つて、『生ずるものは皆んな滅ぶといふ道理をさとり、今迄心の中にあつた疑念の雲がすつかり晴れた様に喜びをかんじました。馬勝と別れた舍利弗は直ぐに、かねての約束の通り目連に事の次第を話して二人は共に佛陀の御許に行くことになりました。』

やがて二人は二百人からの弟子を引つれて佛弟子となり一心に修業しました。かしこい二人は遂に古いお弟子達よりか立派な悟りを開きました。

### 僧の組 心の迷ひ

#### 幽霊の正體見たか枯尾花

私共は常に心の迷ひから何んでもないことを氣にしたり、又怖れたりいたします。此の時私共にしつかりとした心の根底が出来てゐる人なれば、火が降つても水が降つてもビクともしないでせう。

御佛様の尊さ有難さを知らぬ無信仰な人はこんなものでせうか。

昔或る所に臆病な武士がありました。暗い夜道を只だ一人でトボくと淋しい山道を通つてゐたのです。處がフト前を見ると直ぐ眼の前に怪しい白いものがボンヤリと見えるではありませんか。びつくりした其の士は之はきつと世に言ふ幽霊に違ひないと思ひ詰め、怖々傍に近付き、度胸をすえて腰の刀で思ひきり切りつけました。する

と冷い〜掌で土は頬をべたりと撫でられました。初めから怖い〜と思つてゐたのに、今また冷い掌で頬をなでられたので魂消て一生懸命後をも見ずに我が家に逃げ歸りました。

其の晩はあの怖かつた事が頭に浮んで来て夜の明けるまで眠れませんでした。

不思議なことに翌日昨晚の幽霊の出た場所へ行つてよく調べて見ると、これはまた芒の穂が切り落されてあつたのです。

冷い掌で頬を撫でたと思つたのは、露に濡れた芒の穂を切つた拍子に、顔に觸れたのでせう。

世の中には御佛様の御恵を知らないで物事を疑つたり怖つたり、それは〜つまりないことに氣を病んでゐる人等がたくさんゐるのです。ほんとうに可愛想ではありませんか。

それを思ふと私等程幸福なものはありませんまい、眠てゐる時でも起きてゐる時でも、たつた一人で淋しい所を歩いてゐる時でも、絶えずあの御慈悲深い御佛様が朝夕に護つてゐて下さるのです。

## 第四章 九月 第四日曜日

### 説話 満月

今日は年に一度の明月なので、お月様は早くからお化粧をして、日の暮れるのを待つて居られました。ふだんからお月様の美しいのを嫉ましく思つてゐる黒雲は、なんでも今夜はお月様の鼻つばしらを折つてやらうと、いそいで風の所へ行きました。そして、

『オイ風君、今夜は満月だらう、しかも年に一度の明月だ。それで今夜は意地悪をしやうと思ふから、月が出る時分にいつもの山の上まで己を吹きよせて呉れまいか』

『オイ〜またかい、つまりはすることはするものでないよ、お月様だつて年に一度の明月だのに、もし君か邪魔をしたら、どんなに悲しむかれないよ、おなじ空に住んでゐながらそんな意地悪いことはよし給へ。』

『ところがそうはいけないよ、第一なせ僕は月が嫌いだかといふと若し月の出てゐる時、僕がツツと顔でも出してごらん、すぐ下界の人達は『いやな雲が』といつて僕の悪口をいふから腹が立つ、いつたい誰のお蔭で雨が降ると思つてゐるのだ！。とにかく

く、僕をいつもの所まで吹きよせてくれたまへ。』

と、うまく風に頼みました。風も悪いことだと思ひながら爲方なしに承知しました。

そんなことゝは夢にも知らないお月様はニッコリ笑つてお山から顔を出しました。

ところが前には、まつくろな雲が屏風を立て廻したやうに閉ぢこめてゐるので、可

愛い嬢ちやんや坊ちやんの影も見えませぬ。お月さまは、せつかく楽しんで出たもの

をと思ひましたが別に腹も立てず、静かに上つて行きました。雲は、いゝ氣になつて

ますゝ〱大手を廣げてお月様を隠してゐました。

下界では、明るい内からお團子や薄を供へて坊ちやんや嬢ちやんがお月様のおでま

しを待つてゐました。その内に日は暮れましたが、かんじんのお月様が見えませぬ。

そうして、東の空には、いつのまに來たのかまつ黒な雲が渦巻いてをりました。

『マアいやな雲が!』

『にくい雲だなあ!』

と口々に罵つてゐますと不思議にどこからともなく清らかな聲で、

『いえゝゝ、決して雲を憎んではなりません。みなさんが水を飲むことの出来るのも

お米を取ることの出来るのも、そのほか草や木やすべての生きものがいきゝゝしてゐ

枯れてしまいます。水もなくなつてしまふのです。』

といふ者があります。それはお月様でした。風はお月様の清いお心にすつかり感心  
 しました。そして自分が腹の悪い雲に仲間になつた事を大へん後悔しました。さうし  
 て意地の悪い雲を吹き飛ばしてやらうと思ふが早いかブーッと一吹き吹きつけました  
 不意を喰つた雲はさんゝ吹き散らされてしまいました。  
 『でた、でた、月が、まるい、まるい、まんまるい、ぼんの、やうな、つきが』  
 と嬢ちやん坊ちやんは嬉しさうに歌ひながらお月様の影の下でお遊戯をしてゐまし  
 た。

## 佛の組 寛 厚

唐の丹霞天然禪師が嘗て古寺和尚に參じた時、一修業者の甚だしく禮節の缺けてゐ  
 るのを見ました。丹霞禪師は他事ながら心よからず思ひ、『和尚様、何で今の修業者の  
 無禮を御咎めにならないのですか、』と聞きました。すると古寺和尚は却つて、『猥りに  
 他人の非を觀てはならない。』と誠められました。私共お互は、自分の非は棚にあげ  
 ておいて、そうして他人の非がよく目につくものです。すべからず私共は、他に對

しては寛やかで、自分を責むることが厳しくなければなりません。實世間に處して行く時、過つて無禮を受けたり、時に他の誹を受くることは一再到りますまい。けれども一國の師として、朝野の尊信を集めた高僧ですら、人の辱を受くることがあるのですもの、只一介の凡人に過ぎない私共お互は、寛厚の徳を守つて、他を責める念など起さない様にせなければなりません。

かの有名な、夢窓國師は當時七朝の帝師として、道譽一世に高いものがありました。が、或時、鎌倉に下向しようとして、天龍川を渡る船中に一人の武士がゐて、故らに事を構へて鐵扇を振つて國師を傷けました。隨徒は非常に怒つて、之に報いやうといひました。すると國師はそれを遮つて、

「打つ人も打たる人も、もろともに

唯ひとよきの夢のたはむれ」

と詠じて、隨徒の者をお諭しになり、件の武士をもよく悔悟さしました。國師の寛厚、實に佛子の模範であります。

寛厚はこれ實に佛徳の一であります。佛様は私共の非をお咎めになることなく、常に私共の愚癡を嫌はず、過失多きを御寛恕下さいます。先徳はこの廣大なる佛心を讃仰して、自らも亦寛厚の徳を體得されました。

私共も又、四六時中、佛心を離れることがなければ、努めずして寛厚の美徳を體現することが出来るのであります。

### 法の組 大迦葉

佛陀が王舎城で多くの人々を教化遊ばされてゐる時、後に御弟子中、頭陀の實行第一と云はれた大迦葉がまた御弟子の仲間入りをしました。

大迦葉はマカダ國のマハーテッタ村の婆羅門の家に生れ其の名をビツバラヤーナと呼ぶのでありますが、大迦葉種姓の人ですから普通大迦葉（マハーカシャバ）と申します。巨萬の富を持つてゐる名門に生れた彼は榮耀の中に育ち、あらゆる學術を教へられ、生來賢く辯才に長じてゐて、大人を驚かす程でありました。然しながら浮

世の快樂を厭ひ、氣高く尊いものを常に求めてゐました。父母の切なる勸めを否みがたく遂に彼はバハドラカピリヤト言ふ美しい娘と結婚しました。處が花嫁もまた彼と志を同ふする者でありましたから、二人は互に志を語り合つて十二年間と云ふものは睦じく清淨潔白なる理想的家庭を作つてゐました。彼等は常に鋤にかゝる蟲の生命のはかなさを悲しみ、胡麻にわく數知れぬ蟲を見て世を厭つてゐました。遂に彼等は相談の末、召使たちに金銭や米を分ち與へて、只一かゝの修業者となり、西と東に袂を分つて遊行の旅に出かけました。不思議なことには兩人の家を出た日は、丁度佛陀の成道遊ばされた日にあたります。

諸方の村々で食を乞ひながら大迦葉は王舎城の手前ナーラダ村にたどりつき、佛陀の御姿を仰いで、このお方こそ自分の久しい間求めてゐる大師であると覺つて、其の足下に頂禮して初めて御弟子に加へて戴きました。佛陀の懇な四諦の教を聞き、戒を受けて大いに精進した我が大迦葉は、八日目に遂に覺りを開きました。

眞面目に精進した彼は後に頭陀の實行第一として衆中大いに尊敬され、ずつとく後

佛陀の大涅槃ののちは上首となつて、經律論の三藏を結集して其の名を知られてゐす。

第七篇 十月の分

## 第壹章 十月 第一日曜日

### 説話 佛教の傳來

欽明天皇の十三年、十月十三日、百濟の聖明王といふ王さまが、日本へ使を遣はして、佛像とお經とを献上いたしました。これが日本へ佛教の傳はつた始めです。

天皇さまは、大へん結構に思召したのですが、とにかく、大せいの役人たちを集めて御相談なさいました。

物部尾興、中臣鎌子たちは、日本は神の國なのに、そんな外國の佛を拜むことはいけないと申しました。すると蘇我稻目は、三韓の人たちでさへ残らず拜んでゐるといふのに、日本だけがこれをおまつりしないと云ふのは氣の小さいはなしです。といつて、お互ひに言ひあひました。

天皇さまは、それでは汝がおまつりしたらいゝだらうと仰つて、佛像とお經とを稲目にお與へなさいました。

稲目は悦んで、自分の家をお寺にして、佛像をおまつりしました。

すると間もなく、悪い疫が流行りました。尾興や鎌子は、すぐ、これは日本の神さまのお怒りだと言つて、天皇さまに申し上げましたので、天皇さまは、稲目にさう言



つて、難波の堀江へお捨てさしになりました。その後、幾度もこんなことがありましたが、しまひには、佛さまの尊いことがしれて、佛教はますますさかんになりました。

### 佛の組 和光同塵

徳川の中世に桃水和尚と云ふ方がありました。肥前の禪林寺、攝津の法嚴寺等に生まれ、大いに教化してゐられました。處が或日何事か感ずる處があつたのか、寺を飛出して乞食、非人の群にはいつて、彼等と同じ様な事をして暮すやうになりました。和尚はあはれな乞食、非人を救ふには、自分も矢張り彼等と同じ様に生活して、ポツ／＼に教化せねばならないと感じられたものでせう。之を知つた法弟の密禪師は、和尚に邂逅して、言葉をつくして寺坊に歸ることをすすめましたが、聞入れないで、

『如是生涯如是寛、弊衣破碗也閑々、

飢餐渴飲只吾識、世上是非總不予、』

と一偈をのべ、更に王侯貴紳に倅するなかれと諭したと申します。

桃水和尚の言行を以て、直ちに私共佛子の龜鑑とすることは出来ませんが、佛道を深く修めた者でなければそれは到底出来ない業であります。立派な寺院に住してゐながら、その安易さと、徳光を捨て、終つて、かの紅塵の巷にはいると云ふ事は、常人の出来ることではありません。然かも和尚は、傳道のため敢へて現實に行つたので、これを和光同塵と云ふのであります。

修證義第二十四節に高祖大師様は仰せられてあります。

『同事といふは不違なり。自にも不違なり、他にも不違なり。譬へば人間の如來は人間に同せるが如し。他をして自に同せしめて後に、自をして他に同せしむる道理あるべし。自他は時に隨つて無窮なり。海の水を辭せざるは同事なり。是故に能く水聚りて海となるなり。』

我が大聖釋尊は中天竺のカピラへ城で、淨飯王を父とし、マヤ夫人を母として人界に御誕生遊ばせられ、御成年に達しられてはヤスタラ姫をお妃に迎へられ、ついで一子ラゴラ王子をさへ擧げさせられました。かくの如く、人間の威儀態度に一致せられ

て、然る後、發心出家、成道說法、更に入涅槃と、聊かたりとも人間としての威儀作法に違はせ給ふ處はなかつたのであります。同事行を遊ばされたのです。

御覽なさい、あの年が年中引いて終ふことのない大海を。海は美しい水なら容れるが、汚い水は嫌だなど云はない。その度量の大きいことに依つて、總てを容れることに依つて、あの様に變らないで大きいのです。

私共が今直ちに釋尊や桃水和尚の様な立派な行ひは出来ません。けれども自分自身で誠めては先づ手近の御友達と仲よくする、若し心がけの悪い人があるならば、其の人になつて心から愛語して少しでもよい方へ導く、又學校の勉強でも算術が嫌ひだとか、習字がいやだなど云はないで、算術のときには算術の氣持になり、習字のときは習字になりきつて勉強する、と云ふ風につとめるのです。それが只今の皆様にとつての和光同塵であります。

### 法の組 淨飯王の使者

一方我が佛陀を出した故郷カピラエ城では、悉達太子の出城後、なんのおたよりもないので、父の淨飯王はじめヤシヨダラー夫人は、御心配のあまり、そのおやつれ方は、まことにお傷はしい極みであります。春がきて、美しい花が咲き亂れても、誰一人これを見て楽しむものもありません。立派な、ひろい御殿も、たい憂愁の雲に閉ざれて笛の音一つ聞こえない淋しい有様です。この淋しいうちにも、春が過ぎては夏となり夏を送つて秋を迎へ、秋が去つては冬が來り、冬が過ぎて、又春が來る。こうして六年の長い月日は過ぎてしまひました。

恰度六年目に、「太子は悟りをお聞きになつて、佛陀となり、今、竹林精舎で多くの人をお教へになつてゐられる」と云ふ立派な噂が、カピラエ城に達しました。

この噂を聞いて最も喜んだのは淨飯王とヤシヨダラー夫人でありました。餘りの嬉しさに幾度も幾度も、夢ではないかとさへ、おうたがひになりました。

浄飯王はなつかしい悉多太子、今は世の教主、佛陀に是非共お目にかゝつて久方振りに親しくお話しを遊ばしたいと早速使ひを出すことになり、九人の臣下は早馬に乗つて、竹林精舎に馳けつきました。

九人の使は、竹林精舎へ着くと、すぐ佛陀に會つて、「早くお歸り下さるやうに、」と父王の傳言を申し上げやうと思ひましたが、折から佛陀は大せいの人を集めて、御説法最中でありましたから、この御説法の終るまで待たうと思つて、使ひのものも大せいの人にまじつて、お説法をきいてみました。ところが佛陀の説法があまり有難いものですから、王様からの御命令をすつかり忘れてしまつて、二人は其のまゝ大勢の人々と共に出家してしまひました。

カピラエ城では、浄飯王をはじめ、ヤシヨダラー夫人は云ふまでもなく、臣下の者一同首を長くして使ひの歸るのを待つてゐましたが、何時までたつても歸つて來ません。そこで更らに、十八人の使ひを竹林精舎へ送りました。所が今度の使も、前と同じやうに、佛陀の説法を聞いて、そのまゝ出家してしまひました。カピラエ城では、一度

ならず二度までも出した使ひが歸つて來ないので、今度は、王様の一番信頼しておるでになる、ウダーインといふ、大臣が使ひとして行くことになりました。

### 僧の組 自分を傷けても他を助

印度に尸毘王と云ふ大そのめぐみ深い王様がりました、餘りよく施しをしたり立派な行をするものですから、天上にゐる帝釋天といふ神様が、  
『若しかすると尸毘王はあんなに慈善を行つてゐると逝くなつてから帝釋天になるかも知れない。そうすると自分が神様としてゐられない、他の者が立派な尸毘王に味方して自分を追ひ出すに違ひない、これはこうしてはゐられない』と云ふので帝釋天は自分の家來を鳩にしました。帝釋天自身は大きな鷹となつて其の鳩を追ひかけて行きました。

家來の鳩は尸毘王様の所へ飛んで行つて、さも困つた様に、  
『王様々々、私は今悪い鷹に追かけられて來ました、どうかお情けで私をお助け

「下さい」と呼吸をはづまして御願ひいたしました。

そんな事とは知らない王様は可愛相なと自分の袖の下にかくしておやりになりました。大きな帝釋天の化けてゐる鷹は追かけて来ました。そうして

「王様、私の追かけて来た鳩を渡して下さい、情深い王様、私はお腹がへつて今にも飛べなくなり、何卒今の鳩を下さい」と申しました。

然し鷹が何んと云はうとあはれみ深い王様のこと

「鳩は自分を頼つて来た弱い者、お前にやつて見す見す殺さす事は出来ない」と仰せられました。すると大鷹は

「王様、それでは今まで噂に聞いてゐた王様とおぼえませぬ、あの小さな鳩一羽を助けて、この腹のへつてゐる私をば助けては下さらないのですか」と申します。けれども王様は鳩を助けたいが一杯の御情深い王様です、「それでは私の肉を代りにやるから」と仰せられますと意地悪い鷹は

「それでは王様、鳩と同じ目方丈け下さい」と云ふので「王様は御自分の股の肉を切

り取つて與へました。がなか／＼鳩は重いので、遂に王様はからだ中の肉をみんな切り取つて終ひました。

さすがの鷹もこの王様の底知れの慈悲の心に感じました。そこでもう肉を取つて終つたので息も絶え／＼になつてゐる尸毘王様に云ひました。

「あなたはそんなにして迄も帝釋天にならうとしてゐられるのですか。」

王は仰しやいました。

「いゝゝ、私は帝釋天にならうしてゐるのではありません。もつと大きい御佛になつて世界の人々を救ひたい爲めに修業してゐるのです」これを聞いた帝釋天は自分の考へ違ひからこんな事になつたと大變びつくりせられて、王様に心からわび天上の靈藥をつけて上げましたから王様の御身體はもとの通りになりました。そうしていやまして榮えました。

これは御釋迦様の前世の御話です。御佛様は前世からこんな立派な行ひをせられたから世界の聖人となられたのであります。

## 第二章 十月 第二日曜日

### 説話 龍樹菩薩

龍樹菩薩は印度の南天竺の梵士の家にお生れになりました。生れつき大そう賢い人で、年も行かない中に、學問といふ學問はすつかり覚えこんで、何一つしらないものはありませんでした。

龍樹には、大そう仲好しの三人の友達がありました。そしてその頃、大そう名高い忍術つかひのお爺さんに驅を見えなくする術を教へてもらひました。

驅が見えなくなる術を覺えたので四人は、何かいたづらがしたくなつて、或日王様の御殿へ行つて思ふ存分いたづらをしました。その時、王様の家來の中のかしい人やつと命だけは助かりましたが自分達が惡戯をしたのを大さう後悔して、お坊さんになられました。それがあの偉い龍樹菩薩です。

### 佛法僧合級 達磨太子様のお話

南印度の香至國と云ふ國に三人の王子がありました。一番の兄さんを月淨王子、二番目を功德王子、三番目を菩提王子と云ひました。

そうして此國では王様を始めみんなが佛さまの御教を信じて、よくその御教を守つてゐましたから、國がよく治つて、たいへん美しい國でありました。

或日、國王様の御殿で、御釋迦様から二十七代目にあたる般若多羅尊者と云ふ方を御招きして、いつものやうに佛敎の御説教を聞くことになりました。此般若多羅尊者といふ方は、實にお偉いお坊さんで、その頃の印度で此お方に並ぶ者がなはいはれてゐました。またお徳もすぐれ、學問もたいへんあり、何事もよくお知りになつてゐました。それに辯舌がさわやかで、一度御説教を聞いた者は、いつまでも忘れることができない位でした。ですから此國の王様も非常に此お方を御信仰で、ときどき御殿へお招きして、御説教を聞かせて戴いてゐました。

今しも尊者の御説教がをりました。御殿に集つて此御説教を聞いた人達は、皆んな感心して御説教が終つても其座を立ち去り兼ねてゐました。御殿の御庭に遊んでゐた鳥や獸の類までも、お説教中は聲をしづめ羽を休めて、御殿近くの軒下に寄つて来て、首を垂れて聞いてゐました。それ位尊者の御説教は、單に人間ばかりでなく畜生までも感じさせました。それで國王様は、けふのお説教の御禮に、何を尊者に差上げたならば、自分の嬉しく有難いと感じた心を尊者に表はすことができるであらうかと、しばらく御考へになりました。

漸うくのこと御考へ付きになつたのは、其國では二つとない無價の寶珠といふ寶のことでした。國に二つとない位ですから此王様にとつても亦二つとない寶でした。それを差上げたならば、けふのありがたいお説教の御禮のしるしになるであらうと思ひましたので、側らに居りました一人の大臣にいひつけて、寶藏からその無價の寶珠を出させました。それを國王様が、手づからうやくしく三寶にのせて、尊者の御前にさ上げました。

お説教の座はそれで過ぎて、やがて別の御殿で尊者へ御馳走をいたしました。此時王様は三人の王子を尊者の御給侍として傍らに控へさせました。やがて御飯も濟み、お茶を入れて、四方八方のお話のはじまりました時に、尊者はふところから、先き程王様から戴いた無價の寶珠をとり出して、

「お三人の王子様達に一寸お聞きしたいことがあります。と云ふのは此の寶珠、この寶珠は世に二つとない寶である」と云ふが、ほんとうに此の寶珠は、私達人間にとつて、それ程大切なものでせうか、どうでせう、これを皆様にお聞きしたいのです。」と申されました。之れを聞いた王様は王子達の顔を見てゐました。王子達は王子達で互に顔と顔とを見合つてゐましたが、三番目の菩提王子ばかりは、少し笑ひを含んでうつむき加減に考へてゐました。そこで兄の月淨王子が、

「今日 私どもの父王から、尊者様へさし上げた寶珠は、その名の如く無價でありま

『只今、兄上が申上りました通り、まことに得難い寶珠で御座いますが、尊者さまなればこそ得られたので、他の人ではとても得られないものです。それほど此寶珠は貴いもので、これ以上の寶は決して他にはあるまいかと思ひますと。』申しました。すると三番目の菩提王子に向つて、

『あなたはどう思ひますか。』

菩提王子はにつこりお笑ひになつて、尊者の御顔を見上げながら、

『私の考へは兄さま方とは違ひます。此世の中に此寶珠も貴いかも知れませんが、それよりも私達がみんな持つてゐる心の寶の方が、もつと貴いものだと思ひます。かう答へられた菩提王子の言葉は、力強い言葉でした。いかにも之は間違のないことであると自ら信じてゐる程の言葉でした。』

『ありがたう、もうすつかりわかりました。』

と尊者は三人の王子達にお禮を云つて、なんとなく心嬉しさうに、にこ〜なされてをりました。

その後、香至國王は老病のために崩御になりました時に三番目の王子は、父王の柩の前に、七日七夜、一滴の湯水ものまず、一粒の御飯もたべずに、ちつと坐つてお伽をなさいました。その辛抱がよく且つ孝行なものには、あたりの人々も皆んな驚いてしまひました。そして御葬式が済むと、兄の王子のゆるしを受けて、般若多羅尊者の御弟子にして戴きました。

此の菩提王子こそ、やがて『菩提達磨』といふ、私達の好きな達磨さまになられた方です。達磨様は御存知でせう。御釋迦様から二十八代目の位をおつぎになつた、そうして禪宗を御開きになつたお偉い方であります。

### 第三章 十月 第三日曜日

#### 説話運動會

一二三―走れ―

どちらも負けずに、元氣を奮へ、

元氣のないのは、下の下の下！

こんな歌がうれしいうに、樂隊の音に調子をそろへて聞えてきます。

よく學び、よく遊べといふことがあります。運動會だのに、いぢくして、競走に出ないやうな人は、大きくなつて偉い人になれさうにもありません。

病氣でなかつたら、日頃の腕だめしに、うんとおやりなさい。

#### 佛法僧合級 山遊び

山に登つて見て始めて山の偉大さがわかります。松風の音、谷の響も山ならではの、

ほんとうに感興が起つては來ません。

飾り氣の無い山で味ふ自然の風光は、自ら教へてくれる事が尠くは御座いません。

登り行く苦痛に依つて、進歩には苦痛がつきものである事が知れます。

其の苦痛其の汗の後で登り得て頂きに達した時、ほんとうに其の苦痛其の汗の尊か

つた事がわかります。

何者をも征服したかの様な雄渾な氣分を味ふ事が出來ます。この氣分を充分體驗せ

しむる事に依つて、大なる山登りの感興を味はす事が出來ます。

高僧の鳥の聲、谷の響で開悟した方も昔しから随分ある様です。其の話し等もこの

様な機會に話して戴きたい。

又粟等を拾つて御佛に供へると云ふ習慣をつける事も出來るでせう。



## 第四章 十月 第四日曜日

### 説話 二宮尊徳

二宮金次郎は天明七年、相模の柏山村で生まれました。十四の年お父さんに死にわかれ、續いて十六の歳にお母さんがなくなりました。家は大きく貧乏で、二人の弟をかかへて食べて行くことが出来ませんでした。それで兄弟は別れ々々になつて、金次郎は萬兵衛といふ客蕎麦の伯父さんの家に厄介になりました。萬兵衛は朝から晩まで金次郎を、こき使つて働かせました。それでも金次郎は辛抱して、ちつともいやな顔も見せませんでした。

ある年の六月頃、金次郎は近くの百姓たちの田植をしたあとを廻つて、棄てゝある稲の苗を拾つて来て、それを家の側の田へ植ゑつけて置きました。秋になると一掴み程のお米がとれました。こんどはそのお米を蒔いて、苗をこしらへて、それを田へ植ゑつけました。

かうして毎年々々同じことを繰り返してゐるうちに、一かどのお米がとれるやうになつて、金次郎は小さい家を一軒もちました。

その後、金次郎は、小田原の藩主大久保侯に用ひられて、土地を開く役をしました。大久保侯が死なれてからは、下館や奥州のお殿さまに重く用ひられて、安政三年の十月二十日に死にました。

### 佛の組 四 苦

總て宗教は理論から湧いて来たものでなく、實際現實の苦しみを、如何始末するかと云ふ要求から起つて来たとも云へます。即ち宗教の開祖の事蹟などを考へて見ると、單に理論や道理だけで宗教を興してはゐません。もつと極めて實踐的なもので、現實の苦痛を取扱ふものだと云ふ事が知れます。

釋尊は箭の喩と云ふ有名な『佛説箭喩經』を説いて居られます。其れは宗教と云ふものは、哲學的な理論研究を主とするものでなく、實際の苦しみを始末するものでありと云ふ事を、喩で以て説かれてあるのです。

それは、一本の毒箭が飛んで来て自分の體に當つた。そこで第一の問題になるのは

たゞこの毒箭を抜きとつて残に毒の残らない様にすれば良いのである。醫者の處へ行くと醫者はその毒箭を抜いてやらうとします。處が射られた人は先づそれよりも、この箭は何の方向から來たか、誰が一體射たのか、間違つて射たのであらうか、それとも何か怨があつて射たのであるか、又その箭は何々で作られて居るか、等と言ふ事をこんな場合には聞く者が世の中には多い。

自分の願つてゐる處は箭の研究ではない、苦痛を取り去りさへすればよいのである、吳々も誤つてはならない、と釋尊は仰せられてあります。

それではその苦痛と云ふものは、どんなものであるか、今それをお話しいたしませう。

世間でよく四苦八苦と申しませう。佛教では普通四苦に大別し、も一つ委しく云ふならば八苦に分ちます。

その四苦とは、生苦、老苦、病苦、死苦の四つの苦しみのこととあります。

生苦と言ふのは、生るゝ時の苦しみにあります。十月、三百有餘日間、胎内に宿り

五位を経、血内に雜つて色々な苦しみを受け、月みち期が至つて始めて産れる時、一切の筋骨は縮つて伸ることが出來ません。その大なる苦痛あればこそ、吾人は前世の事を總て忘れて終ふと申します。

老苦とは年の寄る苦しみを云ひます。日一日と年を経るに隨つて老い衰へ、見るにも、聽くにも、歩くにも味ふにも、總ての諸覺が役立たずなり、何事にも愉快なることなく、たゞ苦しみのみが感ぜられる。そうして刻一刻死に近づきつゝあるを思へば誠に心細く惱みであらう。之を老苦と呼びます。

病苦とは四大の調和の缺けた苦しみである。人間はもと四大即ち地・水・風・火から成り立つてゐます。そうしてその四大の各々は百一宛の病を持つてゐると云ひます。そうすると四大の合計では四百四病と云ふ多くの病氣を持つことになります。然かもその内の一病に冒されても、五體悉く自由なることはできません。實に苦しみであります。病は即ち死の因であるのみならず、又私共の修業を妨げます。誰かこれを厭はない者がありませうか。

死苦と言ふのは、此の世に名残りを告げんとする一刹那の苦しみであります。水・風・火の三大は各々散壊して、壽・煖・識の三法みな捨離しようとする時、百骸支節悉く切り割られる様であります。そうしてその苦しみを經て終に息を引取ると、之を野外に搬びます。かくなつては、花の顔も雪の肌も何かせん、空しく一夜の煙となり終るのであります。いかなる高貴な方であらうとも之を免るゝことは出来ません。又いかなる賢者、智者もこの死から何人をも救ふ事は出来ません。

わが承陽太師様は仰せられてあります。

『無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身既に私に非ず。命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤蹟なし、熟々観する所に往時の再び逢ふべからざる多し、無常忽ちに到るときは國王大臣、親暱、從僕、妻子、珍寶たすくるなし、唯獨り黄泉に趣くのみなり、已に隨ひ行くは唯是れ普惡業等のみなり。』

八苦については次回に申述べます。

### 法の組 ウダインのお迎へ

淨飯王から佛陀お迎への使者を命せられたウダイン（又は迦留陀夷）は佛陀と同年に生れて、幼少の時から友達で、而かも非常に忠義な人でありました。

初め淨飯王様から佛陀お迎への御命令を承つた時に既に今迄の使者の歸つて來ないと云ふのは、佛陀の御説教が餘りに有難いので皆んなお弟子になつて終つたのであらう。うつかりと行かうものなら、又前の使と同じ様に王様の御命令をお傳へするところが出來ない、大いに考へて行かねばならないと思ひ付き、

『大王さま、もし私の出家をお許し下さいますならば、お使ひを果します。』と申上りました。大王さまから出家することを許されたウダインは、早速、旅の支度をして遠く王舎城へ向ひました。

漸く王舎城についたウダインは佛陀の御説法を聞いて、遂に阿羅漢果を得て佛弟子となりました。佛陀の御許に來てから、もう既に一週間餘りの日は經ちましたが、

未だ大王様の御命つけをお傳へする折がありませんでした。然し花咲き鳥歌ふ良い時候になりましたからウダーインはバハールグナ月の満月の日（二月中旬以後三月上旬の月）に佛陀に見へ、

「佛陀さま、今や野には鳥歌ひ、草花は麗はしく匂ひ、樹々の梢には縁満つてゐます。まことに郊外に出づる好い時候となりました。此の好い時期に待ちあぐみ給ふ故郷の大王様に、お會ひ遊ばしてはいかゞでございます。こゝぞとウダーインは熱心を顔に表はして淨飯王の傳言を申上りました。」

ウダーインから懐かしい御父淨飯王の御傳言をお聞き遊ばされた佛陀は、故郷の家族教化の時期の到来した事をお感じになり、快くウダーインの申出でをお取りあげになりました。そうして佛陀初め多くのお弟子達は旅の支度を充分にして、はるく北の方の郷里に向はれたのであります。

御歸郷をおすゝめ申上げて成功したウダーインは、小躍して喜び、空をふんでカピラエ城に歸り、直ちに淨飯王の御前に出て、此の由を委しく申上げました。

淨飯大王様始めヤシヨダラー夫人のお喜びは更なり、城民こそつて氣も狂ふばかりに喜び、急いで歓迎の準備に取りかかりました。間もなく町の隅々までも立派に準備が出来て愈佛陀御到着の日が明日にせまつて來ました。

### 僧の組 やまとだましひ

私共日本人が世界の誰に向つても傲慢することの出来る美しい立派なものを、皆さんは一つ宛持つてゐらつしやいます。皆さんはそれを御存じですか。

その立派な寶とも云ふべきものは、大和魂です。この大和魂を持つてゐるからこそ日本人が今日、世界の一等國と言つて威張つてゐられるのです。顔は日本人であつても、若しその人は日本魂を持つてゐないならば、その人は日本人と云ふことは出来ません。私共はこの日本魂をしつかりと胸にいだいて、それをますく立派にみかいてゆかねばなりません。

時は十月三十一日、學校で天長節の御式をすました幸一樣と芳枝さんは、一たんお

家へ歸つてから、また二人揃つて、天皇陛下のゐらせられる宮城を拜みに、二重橋まへの廣場へ行きました。

家々の門には日の丸の旗が、朝風にヒラ／＼と動いてゐます。電車も國旗も立てゝゐます。電車が賑やかな町を通る時には、恰度國旗のトンネルを走る様でした。幸一と芳枝は廣場に立つて、天皇陛下のゐらせられる御殿の方に向つて、最敬禮をしました。そうして心の内で、今日のおよるこびを申上げました。やがて芳枝様は、

「兄さん、かうして此處へ立つて、宮城の方を拜むと、獨りでに頭が下つて、どう云ふ譯か知りませんが、涙が流れますね。」と云ひました。兄の幸一様も、

「まったく僕も涙がこぼれたよ。」と云つて、顔を見合せました。二人のリンゴの様に美しい頬には涙の流れたあとがあり／＼と見えしました。

此の時、二人のうしろで、

「君達は日本人だから、涙が流れるのです。」と、云ふ聲がしましたから、二人が振りかへつて見ると、其處には白いひげのはえた一人の年をとつた將校が立つてゐました。其の將校は、

「感心な子供さん達です。君達の先生や御両親は、餘程よい方だと見えますね。君達は今に立派な人になれるでせう。」

と言つて、大きな手で二人の頭をなでましたが、其の將校の目からも、ポロ／＼と涙が落ちました。

幸一様と芳枝様は、この立派な將校に、お父様やお母様や學校の先生が賞められたのが嬉しくてたまりませんでした。それが嬉しいと思ふとまた涙がこぼれました。將校は、

「君達の其の心がやまと魂です。いつまでも其の心を失はないやうにしなければなりません。」

と優しく言つて、ガチャ／＼劍の音をさせて歩いて行つてしまひました。  
幸一樣と芳枝様は、暫く其の後姿を見送つてゐましたが、やがてまた電車に乗つてうちへもどりました。

けれども、いつまでも、いつまでも、其の時の立派な將校の、強い中にも何處となく優しい處のある顔と、其の時言つた大和魂と云ふ言葉が忘れられませんでした。

(典據—樋口紅陽氏「小學童話、二學年」)

## 第八篇 十一月分

## 第一章 十一月 第一日 曜日

### 説話 九色の鹿

男が山奥の泉へ陥りました。

『助けてくれい!』と言つたけれども、四邊には誰もをりません。男は、あッぶあッぶ言つて、観音さまの名を呼びました。

すると何處からか、一匹の鹿がやつて来て、角でひよいと引ツかけて、岸へ引づり上げてくれました。その鹿は九色の毛色をした、それはく美しい鹿でした。

男は大さうよろこんで、どんな御禮でもしますからと言ひますと鹿は、

『御禮はいりません代りに、私がこの山にあるといふことを誰にも言はないで下さい』と言つて、何處かへ行つてしまひました。

その頃、王様のお妃が大病でした。ところが毎晩、九色の鹿の夢をござらんになつてこの鹿をほんとに捕らなければ私の命がないのだと言ひました。

そこで王様は、國中へお布令を出して、九色の鹿の居る處を教へた者には、たくさんなお金をやらうと仰ました。

男はこれを聞いて、鹿の言つたことを忘れて、王様に鹿の居る所を申し上げました。王様はよろこんで、大せいの兵士をつれてすぐ山の奥の泉の側へおいでになりました。

すると九色の鹿が王様の側へ出て来て、恩しらすの男のことをすつかりお咄しました。

王様は大そうお怒りになつて、

『そんな約束を守らない慾深男に、やる褒美は何もない。』と言ひました。

### 佛の組 八 苦

前回に述べた生老病死の四苦に、愛別離苦、求不得苦、怨憎會苦、五陰盛苦の四苦を加へたものが即ち八苦であります。

愛別離苦と言ふのは、親子、兄弟、親戚、知友の遠く別れて相會ふ事のできない悲であります。海山數千里の他郷に在つて、なほ常に望郷の想にかゝれるのも、この別離の悲みに依るのです。又再び會へるに違ひないと云ふ別れの時でさへ、互に暗涙に

咽ぶのも之が爲めです。ましてや、再び相會ふ機會のない死別の悲しみは又格別であります。生きとし生けるものでこの愛別の苦を受けないものはありますまい。

求不得苦と云ふは、人は常に自分の利を得ようとしてゐる。けれども思ふ様に得られない爲に、日夜心身を苦しめて、安き心であることがない。之の苦しみを指してゐます。

『大無量壽經』の中に『常にまた求め索むれども、時に得ること能はず。思ひ想へども益なし、身心ともに勞れて、坐るも起つも安からず』とあります。之が即ち求不得苦です。

次に怨憎會苦と云ふと、人は各々心と口が一致せず、言念は實意がなく、内心ではつねに人を怨み憎み、何かあれば假令親子兄弟の間柄でも、あたかも犬と猿の様に相争ふ、之事を言つてあるのです。『或は心に諍ひて恚怒する所あり、今世に恨める意、微しく相憎嫉すれば、後世には轉たはげしく大怨となるに至る、所以は如何となれば世間の事更に相害す。時に相破すべからずといへども、然も毒を含み、怒りを蓄へ



憤りを精神に結びて自然に尅識して、相離るゝことを得ず、皆當に對生して更に相復すべし。』とさへ大無量壽經に説かれてあります。

最後の五陰盛苦は憂悲惱苦とも云ひます。五陰とは色、受、想、行、識の五である。盛とは盛大の意味です。生、老、病、死の苦が内に通り、寒熱飢渴の苦は外から迫り來ります。誠に我々の五陰の身は惡業の所感、衆苦の本源でありますから、我々はこの身心のある限りはさまざまの苦しみをうけて、一生愁ひと悲しみの内に迷つて終ふのであります。

經文の中に『三畧安きことなし、猶火宅のごとし、衆苦充滿して甚怖畏すべし。』と説かれてあります。實に考へると三界六道みな苦であると云へませう。けれども右の四苦八苦ばかりは、人に貧富貴賤の差はありとも、之に惱まされぬものとはありません。

いでや、私共お互は、共に手を取り合つて、御佛様を通じて深い宇宙の哲理を探り四苦八苦を解脱して、安き天地を作る爲めに精進いたしませう。

### 法の組 佛陀の祖先

愈々佛陀の御到着の其の日が來ました。隅々迄も美しく掃き浄められ、人々はきれいな着物と着かへて、まるでお祭りの様です。人々は四方から雲の様に集まつて佛陀のお歸りを待つてゐます。淨飯大王さまも一族の人々と共に多勢の家來に圍まれて、城の南の門迄御出まじになり、佛陀の一行を今かくと待ち受けてゐられます。

其處へ、まもなく佛陀はたくさんのお弟子達をお伴れになつて、御到着遊ばされま

した。人々は、世界の總ての者の大導師となられた佛陀の行列は、どんなに華やかなものであらう、佛陀の御姿はどんなに立派に装つてゐられるであらう、と胸をおどらして待つてゐましたのに、目のあたりお迎へした佛陀のお姿は、汚ならしい僧衣を着て手には鐵鉢を持つてゐられます。これでは普通の乞食沙門と違ふ處がないと總ての人々は驚きあきれました。殊にお父淨飯大王さまは、今は兎に角も、その昔はカピラエ城

の太子であつた佛陀が、今父の城に歸つて來るにこの見すばらしい風は何事と、遂にお悲しみとお怒りのあまり、

『あなたは如何してそんなにやしい眞似をして、人々の前でこの老いた父を辱しめやうとするのですか。』と佛陀をお責めになりました。

『大王さま、これは私共の祖先の姿です。』

『あなたは何と云ふことを云はれるのです。私の家系からは未だ一人の乞食も出されたためしはありません。』

『大王さま、あなたの仰しやる釋種はなるほど王系です。然しそれはあなたの祖先です。今佛陀となつた私の祖先といへば即ち過去の七佛であります。これ等過去の七佛は、この様な風で道を悟り、又この通りに行乞をしたのであります。』一度びは御立腹遊ばした大王さまも、佛陀の慈悲に溢れたお顔と、何處となく備はる佛陀の御氣品に接しては、自然と怒りも解けて終ひました。

それから佛陀は大せひの人々に『ベサンタラ物語』と云ふ、施しをよくしたベサンタ

ラ太子の物語りをして、懇ろに道の有難さをお説きになりました。

この御説法を聞いた人々は、さすがに佛陀の御徳を讃へ、歡びに満されて家路につきました。

### 法の組 のどかな中のかなしみ

御釋迦様が十二才の春でありました。

美しい野原の景色を見る爲めに、お父様に誘はれて程近い郊外へ出られました。

若緑の森を背景として、まばらに立つてゐる棕櫚の間を縫ふてゐる銀の様な流れは岸邊の鳳仙花などの美しい草花を寫してゐます。小鳥は楽しそうに歌ひ、白鷺は萌え出づる若草のしげみをかき分けてのどかに歩いてゐました。まことに長閑な美しい春でありました。

太子様も大變喜ばれたに違ひありません。けれども御洞察方の深い太子様はこの楽しいのどけさの裏面にも堪へ難い哀れなかなしみのあることをお知りになりました。

『黒い顔から汗を流して耕してゐる農夫、又鞭で打たれてはあへぎつゝ働いてゐる牛その苦しきは何んなであらう。又よく見てゐると蟻は蜥蜴の餌となつてゐます。蜥蜴はまた蛇に喰はれてゐます。その蛇や蜥蜴は鳶の餌食となつてゐるではないか、弱い者は強物からいじめられてゐる、物一つが生きてゐる爲には澤山の者が苦しき又は殺されねばならない、何と云ふあさましい有様であらう』

とお考へになると、太子様はとあるジャンプ樹の蔭で座禪をしてなほ深く人生のことをお考へになられました。

お父様は太子様の御姿が見えないので、其處此處とお探しになつてゐられますと、太マ様はジャンプ樹の蔭で禪定に入つてゐられるではありませんか、お父様の驚きはどんなでせう。而も日はもう西に傾いてゐるのに、ジャンプ樹の影は場所をうつさず矢張り太子様に蔭をしてゐます。不思議なこの有様を見て一そう大王様はお驚きになりました。

『座禪してゐられたと云ふ事は出家のまねをしてゐられるのだ。アシダ仙人の卜つた

様に若しか、たつた一人の太子が出家をするのではあるまいか』

父の大王様の御心配は一通りではありませんでした。

## 第二章 十一月 第二日 曜日

### 説話 小野道風

小野道風は皆様も御承知のやうに書の名人です。はじめ、いくら稽古をしても思ふやうに書けないので、いや氣がしてゐましたが、丁度その時、庭の柳に蛙が飛びつかうとして、いくどもくしくじつて、とうとうしまひに飛びついたのを見て、何でも一生懸命になつたら、出来ないことはないと思つて、それから、一心に勉強しましたので、しまひに書の名人になつたといふ名高いお話があります。

### 佛の組 三 歸

聖徳太子様の十七憲法の中に、

『篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり』

とのたまひし如く、凡て佛教信者が大切なる寶として貴ぶべきは、佛と法と僧の三つ

であります。三歸とは實にこの佛法僧の三寶に歸依することでありませぬ。何故三寶に歸依すべきか、其處に三寶の偉大なる恩のある事を知らねばなりません。

佛の恩は廣大無邊、周遍しない所とはありません。花の笑ひ、鳥の歌ふのも皆これ佛の恩力であります。葉の落ち、枝の枯れるのも皆佛の恩力です。この恩力に背反した時、私共は徒らに勞し苦しみます。この恩力に隨順した時、功を收めて、恩徳を感ずることが出来るのであります。私共の今日あるのも、天皇の恩、社會の恩、父母の恩、其の他の恩あるが爲めではあります。結局佛の慈悲に外ならないのです。

佛の正法は、天に充ち地に満ちてゐます。私共がこの正法を信受して、心に會し身に體した時、弱い者は強められ、曲つた者は正され、穢あるものは淨められ、苦惱のあるものは救はれて、直ちに淨妙の樂しみを得ることが出来るのです。けれどもこの正法も、見るに眼なく、聞くに耳がなければ、どうすることも出来ませぬ。其處で我が釋尊は、これを憐み、四十餘年間東奔西走、横説、遊説を遊ばされ、先聖は又これを経卷として後世に傳承してくれたのであります。經卷は實に私共が正法を見る

眼であり、正法を聞くの耳でありますから、苟も不敬にわたるやうなことがあつてはなりません。

佛の恩徳に感じ、佛の正法を信じて、自他兼濟、精進和合、克く之を宣揚するものが、即ち僧であります。僧の力める所は、自分が一歩進むことが出来たならば、顧みて他の者もまた一歩進ましてやらうと希ひ、共に相携へて佛の道に進み、報謝の願行を念んずることでもあります。こゝが僧の私共の勝友である所以です。

私共は常に三寶即ち佛の慈恩と、佛の正法と、佛の清衆たる僧侶によつて、常に不可思議の饒益を被つてゐるのです。どうして私共はこの恩に報ひずにおかれませう。三寶に報ゆるとは他ではありません。實に篤く三寶に歸依して、禮拜供養し、四六時中、佛心を以て自分の心とすることでもあります。

### 法の組 ヤシヨダラー夫人

ニコロダ樹園で一夜を過し給ふた佛陀の一行は、翌日、大王さまの御招待を受けて

城中に行き、御供養をお受けになりました。

お食事が御すみになると、宮中の大臣方や婦人方が悉く出て来て佛陀を禮拂しました。然し只一人ヤシヨダラー夫人のみは一室に閉ぢこもつてお顔を見せません。大王さまは、

『佛陀、一度ヤシヨダラー夫人に會つてやつて下さい。夫人はあなたが黄衣をまとはれたと聞いては自分も亦常に黄衣をまとひ、あなたが一日一食になさつたと聞いては一日に一食しかとらず、あなたが香華を用ひられないと聞いては直ちに香華を遠ざけ、ひたすらに自分を護つて、たゞラゴラの生長を楽しんで來ました。誠に徳の高い夫人です。』

と御留守中のヤシヨダラー夫人のお話をなさいました。

佛陀は夫人の貞節に感じ遊ばされ、親ら夫人の部屋をお訪れになりました。ヤシヨダラー夫人はなつかしい佛陀を拜して、何ものをも打忘れて御足下に打ふして心ゆく許り禮拜を遊ばしました。

佛陀は懇ろに慰め、誠をこめてお教へ遊ばしました。そうして月緊那羅の本生譚をお説き聞かせになりました。

「昔、あの雪に覆はれてゐるヒマラヤの山に、チャンドラと云ふ者が妻の月女と共に住んでゐた。二人は身に香をぬり、花の薄衣をまとひ、花粉を食べて、樂し氣に清い小川のほとり、白銀のやうな白沙の上で歌ひ踊つてゐた。その折柄五つの武器で身を堅めて只一人で旅してゐたベナレスの梵達王が通りかゝつて、月女の美しさに囚はれ、『夫を殺して月女を妻にしやう。』と悪い考へを起して、遂に梵達王はチャンドラを射た。そうして王はいろ／＼と王宮の美しさを説いて誘つたが、月女は怒りと悲しみて身を震はし、遂に王の望みを聞き入れなかつた。王は望を失つて其處を去つた。月女は神々にあらゆる誠をこめてチャンドラの蘇生ことを願つた。そうして遂に神々の力を得て再びチャンドラは生きかへり二人は月の山で樂しく暮した。その月女と云ふのはヤシヨダラーであつた。御身は前の世からほんとうの貞節をたくして呉れてゐたのだ」とお讀めになりました。

そうして其の日も暮れ方になつたので、又淋しいニクロダ樹林へお歸りになりました。

### 僧の組 三時殿とヤスダラ姫

大王様は太子様が考へごと許りなされるので、何時出家せられるともわからないとて夜な夜なの夢の間も不安でなりませんでした。

いろ／＼御考への末、太子様の心を出家さゝない様にするには充充おたのしみをあたへるより外に方法がないと大臣達と相談をして三時殿と云ふ三つの立派な御殿をお建てになりました。三時殿と云ふのは寒い時、暑い時、雨の降る時に各々適した御殿で、まことに結構な住居でありました。又それぞれの御殿に其の時々の美しいものや愉快なものを集めては、太子様の御心を引きたゞさうとつとめられました。諸國から集つて来た美しい少女等や賢い少年達が召し出されて太子様の御相手をし、鳥や動物さては花までも御心を浮たゞせる様なものばかりで御座いました。

この様に父王様の深い御心づくしのおくわだても太子様には却つて淋しい思ひをま

すのでありました。楽しいよろこびであればあるだけ、其裏には堪へがたい悲哀があります。あだかも美しく匂やかな薔薇の花の陰にも、痛々しい荆の隠れてゐるやうに。そうして又々深い禪定に沈まれるやうになりました。大王様は定めし太子様が三時殿で楽しく遊ばれるであらうとお思ひになつてゐたのに、却て太子様をもの思ひに沈ませてしまつたので、見るも氣の毒な程がつかりなさいました。けれども大王様の出家を思ひといまらせやうとする御心づくしはまだやみません。

今度は國の内外からたくさんのお姫様をおまねきになつて、大きな演藝會を開かれました。之は太子様のお嫁えらびでありました。其の日たくさん美しい姫方が集まりました。其の美しい姫達は一人一人得意の技をいたしました。其の時太子様は一人の愛らしい少女に自分の頸かざりをおあたへになりました。

少女の名はヤシヨダラー姫として太子様とは従兄妹にあたる方でした。美しく優しい姫は遂に大きな結婚式の後太子様のお妃となりました。

## 第三章 十一月 第三日 曜日

### 説話 鼎

仁和寺の若い坊さんたちが、酒に酔つばらつて大騒ぎをしたことがありました。そのうち一人の坊さんは、なんでも皆を笑はせてやらうと思つて鼎を冠て躍つて出ました。『やア鼎のお化けだ！面白いなア。』とみんなは、大よろこびでした。

酒宴がすんで、坊さんは鼎を脱がうとしました。ところが、どうしたものか、いくら引ッ張つてもいくら藻掻いても、ちつともぬけません。

さア、大變なことになりました。みんなは酒の酔が一べんに醒めてしまつて、お醫者を呼べの、藥屋へ行けのと、言つて、うろ／＼しました。

お醫者は吃驚してやつて來ました。けれども、これは藥を飲まず譯にも行きません其うちに鼎の中の顔が、ぷく／＼に腫れ上つて來て、氣息が出來ないやうになりました。死んでしまつては、大變です。爲方がないので、大せいの坊さん達は、鼎の足と坊さんの足とを持つて、ぐん／＼引ッ張りました。

やつとのことば抜けたのはよろしいが、耳も鼻も、すつかりとれてしまつて、それこそほんとの、ずんべら坊になつてしまひました。だから惡戯もいゝ加減にしておくものですよ。

### 佛の組 三毒・三界・三學

私共は何故に此宇宙の實相を見究めることが出来ないのせう。それは心の迷ひがある爲です。其の迷ひの根本をなしてゐるものは、三毒即ち貪・瞋・痴であり、すべからず三毒を先づ除かねばなりません。かの三界と云ひ、三學と云ふのも皆この貪・瞋・痴について申したものであります。

三界とは、欲界・色界・無色界の三つのことでありまして、みな衆生心中の三毒に對して立てられた境界であります。欲界は貪欲、色界は瞋恚、無色界は愚痴です。随つて私共の心の中に、三毒をいだいてゐる間は、どうしても、この三界で迷ひ苦しむつゝも、到底其の苦しみ迷ひの三界を出づることは出来ません。

それではどうすれば、三毒を亡ぼすことが出来るのでせうか。此處に於て三學の修業が必要なのであります。

三學とは戒・定・慧の三つであります。

戒とは戒律とも申しまして、釋尊の定め給ふ掟を守つて非を防ぎ、心を清淨に保つてあります。

定とは、禪定とも申します。一口に云へば心を靜かにすること、心を一境に落ちつけて、亂さないことです。それが宛然も、波の靜つた水の澄みきつた様になつたことを云ふのであります。

慧とは、智慧のことでもあります。かの日光の照すやうに、私共の心の迷ひ闇を晴らすものであります。

三毒を亡ぼして、苦しみと迷ひの三界を出づるには、先づ戒律を保つて禪定に入り禪定によつて智慧を得なければなりません。三學なれば即ち迷を離れて、遂に佛果を證ることが出来ます。

三毒は常に私共を取りかこんでは、迷ひの苦境に引き入れつゝあるのです。日常の總ての時に於てこそ三學を體得することが出来るのです。夢安閑と時を空しく過してはなりません。



法の組 難陀とラゴラの御弟子入り

その翌日は、淨飯大王さまが大へんお年を召されましたから、佛陀とはお母様異ひの弟にあたる難陀王子に王位をおゆづりになる式と、お妃の披露が併せ行はれました。このお祝ひに招かれた佛陀は、一族の人々の乞ひに任せて一場の御挨拶を遊ばされました。然しながら、その挨拶は普通、誰もものするやうなお祝の挨拶ではありません。『人間のほんとうの幸福は王になることでもなければ、立派な御殿に住むことでもなく、又おいしい御馳走を食べることもありません。寧ろそのやうなものが私共を苦しめるのです。人間のまことの幸福といふものは、その様な慾をすて、終つて大安心の悟りを開いた時にこそ得られるのであります。』とお述べになつたのであります。

そうして供養を受ける爲めに、佛陀はお持ちになつてゐられた鐵鉢（食器）を難陀にお渡しになりました。難陀がその佛陀の鐵鉢においしい御馳走を満して佛陀のいらつしやつた部屋に行きますと、もう既に佛陀はニコロダ樹園へお弟子達を伴つて歸られた後で、其處には影もありません。

昔から印度では供養のために受取つた鐵鉢は、必ず自分の手でその人に返さねばならないことになつてゐましたので、難陀は是非なく、その鐵鉢を持つたまふ、佛陀の後を追つて、とう／＼ニコロダ樹園まで行きました。

難陀の來るのを待兼ねてゐられた佛陀は、いろ／＼と説きさとして遂ひに難陀を出家さして終ひました。

第七日目のことヤシヨダラー夫人は、佛陀の一子ラゴラに美しい着物を着せて、佛陀を指し、

『あの太勢のお弟子にかこまれて來る方が、御身のお父様です。行つてお寶を頂いていらつしやい。』

と教へました。ラゴラは早速佛陀の御袖にすがつて、

『お父上、お寶物を戴きたうございます。』と申しました。そこで佛陀は、

「御身の欲しいと云ふ寶物は普通世間で云ふ寶物のことを云ふのか。もし左様だとすれば、それらの寶物はまことに消えてなくなり易いもので、また苦しみの種となるつまらないものである。だから私は可愛い御身に苦しみの種になる寶物などを與へたくない。私は何時迄使つても消えない、そうして苦しみを樂しみにすることの出来る眞理と云ふ寶物を持つてゐるから、それを御身に讓る。」

と仰せられて、そのまゝラゴラを出家させられました。ラゴラは此時、漸く七歳でありました。可愛いこの新しいお弟子を、大きな御弟子方はみんな可愛がりました。

### 僧の組 四門の出遊び

美しい花の様なヤシヨダラー姫が優しくも朝夕かしづき御なぐさめ申上りましたが、三時殿が何の役にもたゝなかつた様に、大きな宇宙を救ひたいと思ひたつてゐる太子様の御決心には矢張りゆるみが来ませんでした。

太子様は幾度出家したいと御願ひしようかと思つたかわかりませんが、いつも御心配そうな大王様の御顔を御覧になつては、御孝心深い太子様は意氣地なくも申上げる事が出来ないのです。そうしてはますく一人でもお思ひに沈ませられるのでありました。

大王様は一たいどうすれば太子の出家を止める事が出来るであらうかと、日夜御心をなやましてゐられました。天氣の良い日、城から出て廣々とした晴れやかな天地を御覧になれば又少しはお心もなぐさめられはすまいかと御思ひつきになりました。そこで太子にその事を申されました。

そこで晴れ渡つた或日太子様は父王様の仰せの通り多くのお供をおつれになつて東の門から御車で御出ましになりました。

すると一人の老人がやうやく杖にすがつてヨボ／＼と歩いて來ました。

目ざとく是を御覽になりました太子様は、

「あれは何故に細り弱つてゐるのか」と御側の者に御たすねになりました。

御側の者は何氣なく

「あれは老人で御座います。かつては私共の様に若く達者でありましたが寄る年波にあの様に誰でも弱り細るもので御座います。」と申上りました。之をお聞きになつた太子様は人間の運命のはかなさを、しみ／＼とお感じになりました。早く今のうちに何とかして道を求めて置かないと御自分も又徒らに年をとつてしまふ。どうしたら早く道を求めることが出来るであらうかと御思ひになりますと、もう少しの間も遊ぶどころのさわぎではなくなりました。すぐに御車をかへして御城にかへられました。

そのうち、太子様は再び大王様にすゝめられて、いたしかたなくも、今度は南門か

ら出て見ることになさいました。

この前老人が太子様の御目にとまつた爲めに折角の御遊びが、むだになつてしまつたので今度は嚴重に、みにくいものゝない様との御達しを町に出して置かれました。

ところが又一人の乞食の病人が草の上に倒れて、うん／＼と唸つてゐました。太子様は是を御覽になつて、

「人間はあゝして苦しまねばならない、自ら求めないでもまぬがれることの出来ないものだ」と御考へになつて又其の日も御城にかへつてしまはれました。

その次の日今度は西門から御出ましにならうといたしますと丁度通りあはした葬式におあいになりました。

泣き悲しんでゐるのは妻や子であらう、昨日までは睦じく暮して來たであらうに今日は早や永久の別れ、それを悲しんでゐるのであらう、あゝ人はみんな一度は死ぬ時が來るのだな、私もまたやがては……と人生の無常を御思ひになつて嘆息をつかれ其の日も遊びを中止して御殿へ引きかへされました。

今度は北の門から出かけられました。すると今度は老人も病人も死人もありませんでしたが、何となく人並でない人が、一寸變つた風をしてゐるのに出あひました。太子様はこれを御覧になると何となく親しく尊い感じがいたされました。そこで早速および寄せになつて

『あなたは何と云ふ方ですか。』

と丁寧ていねいに御尋ねになりました。其の人は

『私は出家であります。』

と御答へしたかと思ふと早や其の出家の姿は多くの人の中へ消えてしまひました。

『あゝ出家とは何と云ふ自由な身の上であらう、あの様な出家の身の上がうらやましい』と太子様は深く心の中に出家の影をみつめまして堅く／＼出家する御心になりました。

おめぐみ深い大王様の三時殿とこの四つの門からの御出遊いであそびは、やがて御佛様となる、よい手引でありました。

## 第四章 十一月 第四日曜日

### 説話 佐倉宗五郎

承保三年の十一月廿六日、佐倉宗五郎は、重い租税で苦んでゐるたくさんな人を助けやうと思つて、自分の刑罰にあふのもかまはないで、將軍のお通りを待ちふせて、お願ひ書を差し出したのです。

このことは、もうよく皆様は御存じでせうからこゝでは略しておきます。

### 佛法・僧合綴 太祖常濟大師の御幼時

創業と云ふことも勿論容易な業ではありませんが、又其の業を守成し尙ほ振興し、兒孫百年の長計を畫策することは決してそれに劣りません。却つて困難である場合も多いのです。

今日我が曹洞宗が寺院一萬四千、僧侶二萬餘人、檀信實に一千萬を算ふるの隆盛を來したのは、太祖常濟大師の力に依る所が頗る多いのであります。固より高祖承陽大師の深く其の道根を培養遊ばされた餘德に相違ないのですが、又常濟大師が能く時代の要求に應じて人心の趨く所を察して、之を擴張遊ばす先見の努力が無かつたならば到底曹洞宗は今日の大を成してゐなかつたでせう。

常濟大師は皇紀一千九百二十八年、(即ち今より約六百五十七年前) 龜山天皇の文永五年十月八日(新十一月廿一日)越前國多禰邑の豪族瓜生氏邸に御誕生遊ばしました。大師の家庭は父母共に敦厚質實、深く三寶を敬ひ、信念は殊に堅い方でありました。特に大師の母君は觀世音菩薩を信すること篤く、大師御懐胎の日よりは、一層身心を淨潔にして、朝夕普門品を誦し、只管、立派な子を得たいものと御祈念遊ばしました。果して御生れになつた大師は世の常の子供とは、はるかに優れてゐました。資性穎敏五才の頃より母の看經に習ふて普門品を誦しなどいたします。然しながら一面また非常に感情に走る御性質があり、時に輕躁な振舞になるやうなことがありましたから、

母君はこれを悲歎遊ばされ、六才の或日、觀世音菩薩の御前に大師を伴ひ、

「感情に走つて瞋恚の焰を燃やすやうでは立派な人にはなれませぬ、瞋恚の恐るべきは毒蛇よりも甚だしいと御經文にも申してあります。以後は誓つて瞋恚の焰は燃やさないと菩薩さまに御約束なさい。」

と懇ろに御訓へになりました。これが大師の御心に深く刻まれて、遂には溫柔になられました。又或時、觀世音菩薩の尊像を禮拜して、其の相好の端嚴微妙なるを仰ぎ見給ひ、突然母君に、「菩薩は何故かくも人々の恭敬を受け給ふのですか。」と尋ねられました。母君は

「此の菩薩はよく諸の方所に應じて、弘誓の深きこと海の如しと聞きますから、廣く經典の理を明らめた善知識でなければ、到底其の功德因縁など説き明かすことは出来ません。唯だ私共は只管に菩薩の大悲に歸命して、其の救ひを仰ぐだけである。」と御答へになりました。この母君の菩薩の靈徳の御話を聞いて大いに感動遊ばされ、遂に私に出家求道の志を起され給ふたのであります。

# 第五章 十一月 第五日 曜日

## 説話 親鸞聖人

真宗の開祖の親鸞聖人は、弘長二年の十一月二十八日に、九十歳でなくなられました。報恩講といふのも、お講といふのも、おとりこしといふのも、みんな聖人の御恩を思ふて歡ばして頂くお勤め日です。

## 佛の組 孝行と御勉強

常濟大師御年八才の春、年來の御志望の通り、越前の永平寺に上り、徹通義介禪師について御剃髮遊ばされました。丁度禪師は養母堂にあられた時でありましたから、大師は親しく禪師の膝下で教を御受けになりました。そうして十三歳の春、師命によつて、孤雲懷辨禪師に就いて、菩薩戒を受けられました。

懷辨禪師は大師の志の勇猛で將來有爲なることを察しられ、切りに歎賞して、

『此の子後生なりと雖も、夙に大人の所作あれば、他日必ず人天の導師となりて、大いに吾が宗を振興すべし。』

と、さすがに禪師の見る力の偉大なるに敬服せざるを得ないではありませんか。所がその懷辨禪師は疾に罹られました。大師は日夕左右に侍り湯薬をすゝめ、親しく看護につとめたのであります。或日禪師は大衆に曰はるゝに、『吾れはこの老病で又起つと云ふことは出来難い。唯だ遺憾に思ふのはこの子（大師）を撫育して、其の生涯を観ることの出来ないことだ。』とて、遂に大師を再び徹通義介禪師につかしませられた。さうして其の八月二十四日懷辨禪師は遂に遷化されましたので大師は義介禪師に随つて一層參學に力をつくしました。殊に古聖先徳の行事を閲してよりは尙銳意發奮、辨道に務められました。一山の大眾は大師のこの勤學參禪振りを見て賞賛し恐れないものはありませんでした。

大師御年十八才の一月、禪師に暇を乞ひ、智識を諸方に訪ふべく雲水修行に旅立た

れました。そうして四ヶ年の間、寶慶寺の寂圓禪師に參じ、比叡山に天台の學を修め萬壽寺の東山湛照禪師、東福寺の白雲慧曉禪師に見え、又紀州の興國寺に行つては心地覺心禪師を拜する等偏く叢席をたづねて深くも學道の用心を究めさせられ、最後に再び寶慶寺に寂圓禪師を訪ひ、二十一才の暮れ、永平寺義介禪師の下に歸省遊ばされました。

この雲水修業が大師をして、遂に曹洞宗の完成者たる太祖たらしめたのでありました。大師御自撰の『圓通院緣起』にも、

『予れ十八才の冬より道心を發し、十九才の秋殊に發心して道を求む、維那に充てられて寺務拔群なり、人々悉く隨喜す、然るに人あり、予を惡口す、瞋恚増發して大罪を犯さんとして之を企つる時、翻悔して思念す、予れ幼歲より拔群出身して職に充つ、望む所は佛法統領して人天を化導せん、是れ大願なり、若し惡事を作さばこの身閑なるべし、今より以後瞋恚を發さず、自然に慈悲柔和にして今善智識となる。是れ併せて悲母祈念の力なり。』

と御記しになつてあります。御孝心深い大師は常に銳意精進しては悲母の御祈念の力であると感謝遊ばされてゐました。

### 法の組 理髮師ウパカ

佛陀は久方振りに故郷に歸られて、豫ねて志し給ふ家族と城民の教化に充分なる効果を得られましたから、父王様にお暇をつげ人々に見送られてカピラエ城を後に再び王舍城に向はれました。

途中アノーマー河の畔、アヌーピヤ迄御進みになつた時、若い有名な釋迦族の人々が、御後を追つて來て出家しました。其の中には佛陀の從兄弟に當る阿那律（アヌルダハ）、提婆達多（デヴァダッタ）、阿難陀（アナンダ）なども加はつてをりました。後にアヌルダハは天眼通第一と云はれ、デヴァダッタは佛敎以外に獨立して一派を開き阿難陀は始終佛陀の傍に忠實に侍つてゐて記憶力がよかつたから多門第一と云はれずつと後佛陀がおなくなりになつた後に、あのたくさんな大經を作つたと云ふ様な有

名な方々でありました。

又この人々と同時に後に熱心なる信仰と志操の堅固で持戒第一と云はれた優波離(ウバリ)も佛弟子となつたのであります。

ウバリはアヌルダハの家に雇はれてゐた理髪師でありました。そうして彼は勿論釋迦族ではなく卑しい須陀羅(スードラ)族の出であります。スードラ族と申しますと只今で云ふ奴隷の階級に當るものです。彼は釋迦族の若い公達が尊い佛陀の御弟子となつて、有難い御教を聽いてゐるのが羨ましくなりませんでした。恰度主人のアヌルダハ其の他の釋迦族の出家する時、彼は命せらるゝまゝに其等の人々の頭の髪を剃りました。之が縁となつて彼は遂に立派な階級であつた人々の仲間入りをして、同様に佛陀の有難いお説教を聞くことの出来る佛弟子となることを佛陀から許されました。ウバリの喜びはどんなであつたでせうか。

然しながら佛弟子の中には未だ、卑しいウバリと同席することを不快に思ふ者がありました。

「あの新しく来たウバリの奴、卑しいスードラの子だと云ふじやないか。」

「左様だ、普通ならば我々に對しては碌に言葉もかけられない身分じやないか。それにすまして同じ様にお説教を聽いてゐる。あきれて終つてもものも云へない！」

「我々の體面にかゝはる。我々はお互に言葉をかけまい、尋ねても返辭もすまい！」

「左様く、言ひ合して相手にすまい。又御説教の時にも同席すまい。」

等と言ひ合つてゐました。

可愛想にウバリは皆の者から別物扱ひにされやうとしてゐます。

皆さん！これは正しいことでせうか？

このことをお知りになつた佛陀は總ての御弟子達をお集めになつて、

「身分や階級の高い低いと云ふ様な區別は、俗世間の者の云ふことである。たぐさんの川には各々名前があるが、一度、海へ流れ入つた時はみな同じ鹹い鹽水となる。それと同じ様に佛門に入れば皆んな佛弟子として同一で、其間に尊い卑しいの區別はないのである」とお訓しになりました。



### 僧の組 一休禪師

一休禪師は後小松天皇の御子でありました。六才のとき出家され名を周建と改められました。それからと云ふものは内外の書物を熱心に學ばれました。そうして至つて利發で詩を作ることにもなかくの妙を得てゐました。

一心に勉強の結果華夷和尚をお師匠として二十七歳の時お悟りを開きました。そうしてこの頃から一休と號するやうになりました。

それから諸々方々を廻つて御布教なさいました。

三十四歳の時には後小松上皇に召されて禪要をお説きになりました。又後花園帝からも非常な信仰を受けてゐられました。

一休和尚は此の様に御徳が高かつた尊いお坊さんであると同時に、一方大そう平民的であつさりとしてゐられましたから、世の人々からは一休和尚と大變な信仰を集めてゐました。

利發な和尚はなかく頓智に丈けてゐました。それで小さい時から人がどんなことをしても腹を立てるやうなことなくいつも先方をアット云はせるのでした。

或時御師匠様と一緒にある家によばれました。處がその家の門の橋に立札が立つてゐる。

『此はしをわたるべからず』

一休和尚は見ましたが平氣で御師匠様の案内をして其の橋のまん中を渡つて家の中にはいりました。其家の主人は之を見て門札を御覽にならずですかとがめました。すると一休は『見ましたよ、それで端をわたらず真中を渡つて來ました』と答へたのでさすがの主人も一休の利發に感心してしまひました。

一休は學徳いよく高くなり、八十八歳までも長壽をして、しづかに十一月二十一日なくなりました。

第九篇 十二月の分

# 第一章 十二月 第一日 曜日

## 説話 釋尊の出城

お釋迦様は、まだ皇子さまであつた頃、しじゆうもの思ひに沈んでいらつしやいました。

王さまは大さう御心配なすつて、どうにかして皇子の心を慰めやうと思つて、隣り國の美しい王女をお嫁さんに貰つて、春になれば春の御殿、夏になれば夏の御殿、秋になれば秋の御殿と、それはく立派な御殿を建て、皇子を楽しみづくめにしてお置きになりました。

けれども皇子さまは、なんとなう鬱ぎこんでゐらつしやるので、こんどは立派な立派な馬車を仕立て、市中を歩き廻りました。

ところが、いつもく途中で、病人だの年寄りだの葬式だのと、それはくいやなものばかりに出くわしましたので、かへつてお氣を腐らせてしまいました。

皇子さまは、いつも、清らかな出家の人がうらやましいと、口ぐせのやうに言つていらつしやいましたが、こんなことがあつてからは、もう辛抱が出来なくなつて、十

二月八日の晩、みんなの寝静まつた頃、たう／＼思ひきつて、お城をお脱け出しになりました。

皇子さまは、ふだんから可愛がつておいでになつたカンタカといふ白馬に乗つて、車匿といふ御者を連れて、お城から十七里も離れたさみしい森へお着きになりました。こゝで馬からお降りになつて、髪の毛をすつぱり斬り落して、冠や綺麗な着物と一しよに御者の車匿にお渡しになりました。車匿は聲をあげて泣きました。カンタカも頭をたれて涙をこぼしてをりました。

『汝は城へ歸つて、お父さまや妃に、よく言つてくれ。なあに少時の訣れだ！』と言つて、皇子さまは、たつたひとり、深い森の中へおはいりになりました。

### 佛の組 諸寺開創と化導

然るに大師御歸省の翌年、正應二年徹通義介禪師は、富樫家尙に請せられて、加賀の大乗寺に移られましたから、大師もまた隨つて大乗寺に到り、専心修道に努められ遂にこの秋、領悟し給ふ所がありました。が大師は未だこれに満足し給はず、更に義介禪師の鍛練をうくること六年、大師二十七才の暮れ、『平常心是道』の公案を御聞き

になつて、豁然として大悟遊ばされ、始めて印可を得られました。翌永仁三年一月、佛祖正傳の袈裟をうけて、宗門の嫡子となり給はれました。これ實に大師二十八歳の御時であります。

この年、大乗寺の開基富樫家の縁族の阿波の海部の郡司、嘗て大師の道風を傾慕し其の采地なる阿波に城満寺を建立して、遙かに開山第一祖に請しましたから、大師は同地に渡つて、大いに教化遊ばしました。其の間或時は九州肥後の大慈寺に寒巖義尹禪師を訪ひ或ひは京都に上りなどして、互に道情を温め宗乘を照揚し給はれました。正安元年、大師三十二才の冬、義介禪師より、『歸りて化を扶くべし』との命がありましたから、直ちに城満寺を辭して、大乗寺に還られました。そうして義介禪師を助けて多くの學徒を導かれたのであります。殊に其の翌正月、十二日より禪師に代つて佛祖の御行跡を垂示遊ばしました。この筆録がかの『傳光録』です。

超えて乾元元年、大師三十五歳、このとき義介禪師八十四歳にて、『老衰して院事を視るに堪へ難し、』とて御退院遊ばされ、大師が大乗寺の主席として第二世となられま

した。間もなく、明峰素哲、無涯智洪、峨山紹碩等の諸禪師、相次いで來つて大師に師事することとなり、その道譽遠近に聞え、一山の規矩準繩もこゝに具はり、本邦稀に見る一大叢林とはなつたのであります。坐禪用心記、信銘拈提等はこの時分の御示教であります。

應長元年、大師四十四歳の御時、曾て阿波の城満寺に於て大師の化導を蒙りたる可鐵鏡に請せられて、加州淨住寺の第一世となられ、ついで得田某の建てた所の光孝寺に住し、更に正和二年即ち四十六歳のとき、滋野信直夫妻並に其の一族の淨信と寄進を悦び、且つ其の地の幽寂を愛し給ひ、こゝに草庵を結ばれて洞谷山永光寺と號して、大いに開教化導に努められました。歸依するもの日に多く、中にも壺庵至簡、珍山源照、西峰覺明等の諸禪師はこの永光寺に於て御弟子となられた方々です。かくして數年の後には草庵一變して一大禪院の規模を有するやうになりました。

然しながらこの大をなした裏面を、拜察して見れば、大師様の御苦心の程もよくうかいはれるのです。この頃大師は御弟子や隨身の方が一時に増加したため、大師は勿體なくもお粥に代ふるに米湯を以てし、香に代ふるに松皮を以てせねばならぬ様なことが稀ではなかつたそうです。

### 法の組 光り輝く黄金の土地

橋薩羅（コサラ）國の都、舍衛城に須達多（スダッタ）と云ふ一人の長者があらました。彼は孤獨の貧しい者や子供を救ふ慈善家でありましたから、誰云ふとなく給孤獨長者と呼んで敬はれてゐました。

或日王舍城の親類に當る富豪の家へ宿つて、圖らずも佛陀を拜して、大いに其の御徳にうたれました。殊に御説教を聞いて非常な喜びを得た長者は遂に佛陀に向つて、『御佛様、御弟子方と共に舍衛城へ御越し下さいまして、舍衛城の者にもあの有難い御教へをお聴かせ下さいませ。』

と御願ひいたしました。佛陀のお許しを得た長者は喜び勇んで直ちに舍衛城に歸つて早速、佛陀始め御弟子方の御住みになるべき寺を建立しようと思ひ立ち其の土地の

物色にとりかゝりました。

佛陀の『静かな所』との御希望がありましたから、長者は都から餘り遠くなくて静かな所をお求めになりました。諸々方々探した結果まことに立派な一つの土地を発見しました。處がそれは祇多（ジータ）太子の土地だったので。長者が佛陀の爲めに寺院を造るから譲つて下さいと願出ると、賣りたくない太子は斷る目的で、

『あの土地は大切な土地だから、あの地面に一杯黄金を敷いたならば譲るが、それではないならば譲れない。』と云はれました。

かうなると長者はどうしても買ひたいと申出て、彼は自分の金庫を開いて、其の廣い土地に一杯黄金を敷きつめました。見るからに美しい金色のお庭が其處に出来たのです。強い太陽の光りに照らされて一面の黄金が輝いたものですから、人々は驚きました。さすがの祇多太子もこの長者の信仰の強いのに感心して、更めて相當の値段でお譲りになりました。長者は非常に喜び、多くの大工、石工を濶まして、遂にあらゆる設備の整つた一大精舎を建立して佛陀をお迎へいたしました。

佛陀の其の時以來約四十餘年間の御傳道生活中、主として御過しになつたのはこの精舎であります。世に祇園精舎と云ふのは即ちこの精舎のことです。

### 僧の組 村を救つた少女

『お母さんあのことはほんとう？』

或日の夕方、美佐子さんはさう云つてお母様にたずねました。

『ほんとうですとも。可愛想に、今夜お庄屋さんのたつた一人娘の、あの可愛い梅代さんが村のために人身御供にあがらねばならないと云ふからねえ。他人ごとよは思はれない。』

『人身御供と云ふと神様へあげるのでせう、お母様。神様は人身御供をたべてしまふの？』『さあ。』お母様も解らない？』

『解らない事もないけれど、お母様も不思議でならない。神様ともあるものが、大事の娘を毎年一人づゝ食べる。もしさうしなければ、田や畑を荒して村の人たちを』

困らすなんて、どう考へてもこれは神様のお仕事とは思はれないから。」

『では鬼様でせうか。』『何だかねえ。』

美佐子さんは、お母様とこんな問答をしてから、しばらく考へてゐましたが。

『お母様！私あの梅代さんの身代りになつて、今夜人身御供にあがります。さうすれば、お庄屋さんでは、どんなに喜ぶか知れませんか。』

『えつ？』お母様はだしぬけに美佐子さんからさう言はれたので、飛びあがる程びっくりしました。息もつまる程でした。

『お母様、私考へたことがあるのよ。きつとそれはほんとうになるでせう。さうすれば村の人たちも喜ぶし、梅代さんも助かるんですから。ねえ、お母さんいゝでせう？ 私きつとお母様はじめ皆んなに喜ばせることがあるわ。』

『どうして？』『お母さんは、観音經をお讀みになる時、お氣のついた事がない？』

お母様も美佐子さんも、それは——熱心な観音様の信心家で、朝と晩にはきつと御佛様におあかしをおげて、観音經を讀みあげるのでした。

美佐子さんにさう云はれて、お母様は口の中で観音經を繰りかへして見ました。

『お、美佐子！それではお前、あの——悪羅刹、毒龍、諸の鬼などにあはむに、彼の観音の力を念ずれば、あへて害せじ——といふことを……』

『え、さうなるのよ、お母様。』

美佐子のことは力づくよく、しつかりとひいきしました。

『美佐子！お前のを、しいその心持に、私は任せやう。』

お父様はさう言つて、此時二人のそばに近づいて來ました。

此村にとつて、又美佐子さんの一家にとつて、むごたらしい一夜はあけました。美佐子さんのお母様は、可愛い美佐子さんがどうなつたかと、昨夜はまんじりとも眠りませんでした。

村の人たちは夜あけを待遠しがつて、山の中の神様のお宮へ容子を見に行つたが、一たいどんなしらせをして來るだらう。鬼神に食はれて終つたと云つて來るか、それとも観音様のみめぐみで美佐子さんが助かつて歸るだらうか。あゝさうあつてくれ、

ばよいが、どうなつたであらう？——とさすが氣丈夫なお母さんも、居ても立つてもおられませんでした。

さうしてお母さんが心配してゐる處へ大せいの村人にまもられて、  
「お母さん！」

ところろげこむ様に、白い着物をきて人身御供にあがつた美佐子さんは何處にけがもなく無事で御家へ入つて来ました。美佐子さんの御家の佛様は一日輝かしいみあかしと立派なお供物がそなへられて、観音經を讀む一家の聲が道行く人の耳にも有難く聞えました。

其の晩は庄屋様が梅代様を伴れて禮を云ふやら、村人が来て村を救つてくれた美佐子さんのために、めでたいさかもりの宴を開くやらで大そうよろこんでくれました。美佐子さんから観音様の有難いことを聞いた村人はみな観音様の信者になりました。

(典拠—佛敎童話第二卷第二號)

## 第二章 十二月 第二日 曜日

### 説話 富士山

琵琶湖と富士山とは一晩のうちに出来たんだと昔から言つてをります。まさかそんなことはありませぬまいけれども、

長元五年の十二月十六日は富士山が噴火した日です。

この富士山が噴火しなくなつたお話をしませう。

三保の松原で、やつと漁師から天の羽衣を返して貰つて、どんなに悦んだことでした。

もう會へないと思つてゐた天のお母様や姉様達の處へ、再び歸つて行くことが出来るのですから、その嬉しさと言つたらありません。天にも登る心地とはこんなことかと言つたのかもしれない。

漁師の望みにより天女は羽衣を肩にかけて、靜かに舞ひはじめました。不思議にも松風の音も波の音も、みんな微妙な音楽の音に變つて、天女の舞に合はせました。「あゝ小父様、私も歸らなければならぬわ、お母さんが屹度心配してゐてよ。で



は失禮しますわ、有難うよ小父さん——さよなら。』かう天女は、言つて空へ舞ひ上りました。漁師は名残惜しさうに見送つてをりますうちに、天女はすん／＼上つてとう／＼霞にまぎれて見えなくなりました。

天女はそれから富士山を越えやうとしますと、どうしたはずみか富士山から噴き出してゐる火の粉が、羽衣の裾へつきました。天女はちつとも氣がつかないで、ずんずん飛んで行きますと、ふいにちり／＼と言ふ變な音がして裾が熱くなつて來ました。天女は何だらうと思つて振り返つて見ますと、まア大變、羽衣がくす／＼燃えてゐるぢやありませんか、天女は吃驚して、すぐ眞下に見えてゐる琵琶湖を目がけて飛び降りました。そして火のついてゐる羽衣をじゆんと水の中へつけました。

琵琶湖の水は吃驚して、

『一たいどうしたんです、大そう焦てゐるぢやありませんか。』と言つて訊きました。天女は泣き出しさうな顔をして、

『まアどうしよう、大變だわ、富士山を越えた時、あすこの火が附きましたの。』と言ひながら今度は、すぶぬれになつた羽衣を、うらめしさうに眺めてをりました。

『さうですか、富士山が、とんでもないことをいたしましたね、よろしい、もうこれからは火を噴かないやうにしろと言つてやります。』と水は云つてお詫びしました。けれども羽衣は、それきり役にたゝなくなりましたので、天女は一晚泣き明かしました。

した。

次の晩、まんまるいお月様が出て、湖水へきら／＼映つたかと思ふと、水は金の絃になつて、ひとりで悲しい琵琶の音色を出しました。天女はその琵琶の音につれて、悲しい／＼歌をうたひました。

その聲はお月さまの光線に傳つて、天にゐるお母さんや姉さん達の耳へ入りました。お母さんや姉さん達は、妹が下界へ行つたきり、歸つてきませんので、大そう心配してゐたところでしたから、妹のかなしい聲をきくとすぐ聲をたよつて、降りてきました。そして妹をつれてうれしさうに天へ舞上りました。このことがあつてから、富士山は琵琶湖に大目玉を貰つて、火を噴くのを止しました。

## 佛の組 大本山總持寺

元亨元年、大師五十四才の四月、能州櫛比の莊にある諸嶽寺の定賢律師が、觀世音菩薩の靈夢に感じ、大師の道風を慕つて、大師に住山を請ふてこられました。諸嶽寺はもと、行基菩薩の開基で、五百餘年來觀世音菩薩を本尊として、地方の尊崇最も厚き靈場であります。定賢律師の靈夢とは、或夜、本尊の觀世音菩薩の慈悲愛怒の光を放

つて現はれ給ひ、嚴かな而も朗らかな御聲で明らかに告げ給ふ所は、『今釋迦牟尼世尊の第五十四世の善智識、當國酒井の洞谷山に出世して大いに法輪を轉せらる。汝速かに此の寺を彼の聖者に譲り、永く佛法紹隆の道場たらしめよ。』であつたと申します。大師も快くこの請を受け給ひ、寺號を諸嶽山總持寺と改め、律院の規模を改めて禪林となし、盛んに開堂演法遊ばされました。爾後は永光、總持の兩寺間を往反して、その化を盛んに遊ばしました。

大師の道聲遂に天聴に達し、元享元年八月後醍醐天皇より十種の勅問を下し給ひました。時に大師の奏對頗る理義明白で、深く教旨にかなひましたから、九月十四日には『總持寺』の勅額の御下賜があり、總持寺をあげて官寺と遊ばされました。更に翌年には、

『能州諸嶽山總持禪寺は、直に曹溪之正脈を續ぎ、専ら洞上の玄風を振ふ、特に日域無雙の禪苑たるに依り、曹洞出世の道場に補任す。云々』との繪旨を下し給はつたのであります。

總持寺はこの様に皇祚の延長を福禱する『勅願道場』とまで隆昌いたしました。後、大師は矢張り、他の寺門をも忘れ給はず、殊に永光寺の經營には心を用ひられ、峨山紹碩禪師等の諸師を率ひて、總持、永光兩寺を興隆し給ふこと、恰も鳥の兩翼の様でありました。

元享三年に至り、大師は淨住寺を無涯智洪禪師に、光孝寺を壺庵至簡禪師に委ねられました。そうして其の翌元中元年には總持寺を峨山紹碩禪師に董せしめられて、永光寺に御退隱遊したのであります。

正中二年、大師は微恙を示し給ひ、八月、明峰素哲禪師に永光寺の後席を譲られ、諸の門下信徒を座下に召して御遺誠を遊ばされ、八月十五日（陽曆九月二十九日）の中夜、溘然として坐化し給ふたのであります。時に御年五十八才、誠に大師の御一生は努力の御生涯でありました。

御遺身は法によつて茶毘に附し、これを大乘、淨住、永光、總持の四寺に分つて各々塔所を建立して奉安いたしました。

大師滅後二十九年を経て、正平八年十二月後村上天皇は佛慈禪師の號を賜ひ、同四百四十八年を経た安永元年十一月には後桃園天皇は弘徳圓明國師を、五百八十五年を経た明治四十二年には明治天皇より常濟大師と追諡し給はりました。大師の徳は思ふべきであります。

### 法僧合級 悪いすゝめに従ふな

御佛様を信じてゐる立派な皆さんは、自分から悪いことをしてやらうなんて思ふことは、勿論ないでせうね。處が自分は悪いことはすまいと考へてゐても、他の者からうまいことを言つてすゝめられると、ツイこれ位のことはかまふまい、これしきのことなら、他人に知れはすまいと思つて、自分では悪いことは知りつゝ、悪い人達の仲間入りすることがあります。元來悪いことは、どんなつまらない小さいことからでも矢張り大きな悪いことゝ同様な悪いことです。又世の中のことは、どんな僅かなことでも人に知れないと云ふ様なものは一つとしてありません。悪い友達などから、悪い

ことをしようとするめられた時、それをきつぱりと斷つた時、皆さんのほんとうの立派さがわかるのです。常に日曜學校にいらつしやる御勉強のほどがよくわかるのであります。

私は只今から、悪い友達からなぐられてまでも、悪いことに加はらなかつた感心な小太郎さんの御話をいたしませう。

日曜學校から歸つてお晝御飯をたべた小太郎様は、御父様の御用で隣村まで御使ひに行きました。その歸り途、ぶどう畠の所まで來ると、悪い友達が四五人集つて何んだかこそそと相談して居りました。小太郎様は悪い所へ來たものだと思ひましたが黙つて通るわけにもゆきませんから、言葉をかけ様と思つて通りかゝると、悪い友達の方で小太郎様を見つけ、

『小太郎がきた。小太郎にぶどうをとらさうよ。』と其のうちの一人が言ふと、

『それがいゝ、それがいゝ。』とほかの者も小聲で賛成しました。そうして一人が、

『小太郎君、どこに行つたの。』と聲をかけました。

「隣村までお使ひに行つてかへる所だ。」

「さうか、ねえ小太郎君、いゝことがあるから待ち給へ。」

「いゝことと言ふのは、どんなことだ？」

「そら、このぶどう畠には澤山のぶどうがなつてゐるだらう。」

「すいぶんなつてゐるね。」『うまさうだらう。』『うまさうだね。』

「たべたいだらう。」『たべたいね。』

「さうだらう。畠の番人のお爺さんは、さつきから彼方へ行つてゐないから、今のうちならわかりはしないから、とつてこないか。」

「然し僕のうちのものじやないもの。」

「そりや、わかつてゐるさ。だつて番人のお爺さんはゐないから、見つかりはしないよ。」

「いやだ。」『だつて君はたべたいだらう。』

「いくらたべたくつても、盗んでまでたべようとは思はないもの。」

「君がたべたくないなら僕たちがたべるからといつてこいよ。」

「君、他人のものを盗むのは悪いことだから、やめたが、いゝよ。」

「みつからなきや、かまふもんか。」『みつからなくても僕は嫌だ。』

小太郎様が歩き出さうとすると、悪い友達は聲を揃へて、

「なぐつてしまへ、なぐつてしまへ。」と云ひました。

可愛想に小太郎様は、四五人の者によつてたかつてなぐられました。小太郎様は逃げることも出来ませんから、じつとしてなぐられてゐるのでした。悪い友達は、かうして、おどかして、ぶどうを盗まさうと云ふ考へでしたから、

「小太郎、早く行つてとつて来い。」とつきとばしました。それでも小太郎は、

「いやだ。」と強く言ひきつて動きません。

「もつとなぐれ、もつとなぐれ。」また小太郎様をなぐりました。

「これでも取りに行かないのか。」

「僕は御佛様を信じてゐるのだ。殺されても他人のものは盗まない。」

『生意氣なことを言ふな。』又しても悪い子供たちが小太郎様を引き倒して、なぐりつけてゐる處へ、ぶどう畠の番人のお爺さんが来ました。お爺さんの姿を見つけた悪い子供たちは、『そうら、番人が来た。』とわれ先きにと逃げて終ひました。

『どうした。』なせ皆んなになぐられたのだ。』と小太郎様を抱き起しながらお爺さんはききました。頭の小ぶをなでながら小太郎様は泣きながら今までのお話をしました。これを聞いたお爺さんは、

『感心な子だ。痛かつたらうがあんな悪い者の仲間して他人のものを盗まなかつたのはほんとうによいことだつた。どれ〜畠のぶどうの一番うまいのを褒美にあげよう。』

と云つて、畠の中の一畠おいしいぶどうをどつさり小太郎さんにくれました。

小太郎さんは頭の小ぶの痛いのも忘れて、喜んでおうちへかへりました。

皆さん、この子供たちのどちらが大きくなつて立派なえらい人になつたでせうか。

(典線——樋口紅陽氏の小學童話二學年)

### 第三章 十二月 第三日 曜日

#### 説話 酒の壺

酒は百薬の長とも言ひますし、お目出度いことにも凶いことがあつた時にも使はれるものですから、好いものだと思つて、がぶ〜飲むと、すぐ酔ばらつて、とんでもない間違ひが出来ます。それでこれをきちがひ水と言ふのです。

昔印度に、大そうお酒の好きな男がありました。

大きい壺に酒を一ぱい造つて、倉の中へしまつて置いて、誰も倉の中へは入れませんでした。

この男の不在にお嫁さんが、そつと倉の中へ這入つて見ると、大きい壺が置いてあるので、何だらうと思つて蓋を取つて見ますと、中に若い女が居ました。お嫁さんは吃驚して、こんな女が隠してあるから誰も倉へ這入つてはいけなと言つたんだと思つて、眞つ赤になつて怒りました。

そこへ男が歸つて来ましたので、お嫁さんは、『私にないしよで、あんな女を何處から連れて来たんです。』と言つて、ワア〜泣きました。あまりだしぬけなので男は吃驚しました。譯を聞いてみると倉の中に女があるといふので、壺の中を覗いて見まし

た。

すると壺の中に若い男が居ました。

男はお嫁さんの胸ぐらを引ッ掴んで、

『汝こそ、あんな若い男を隠して置いて、俺を馬鹿にしたんだナ。』と言つて怒りました。男とお嫁さんとは、掴み合ひをしてわアノ泣いてをりますと、そこへいつも来る尼さんが来ました。尼さんは二人が泣いてゐるのを見て、驚いて譯をだづねますと壺の中に何かあるといふので、蓋をとつて見ますと、きれいな尼さんがをりました。尼さんは、ほかにあんなきれいな尼さんを頼んで来たものだからこんなことを言つて私を来ないやうにするんだと思つて、ぶん／＼怒つて歸つて行きました。

するとそこへ、又一人の坊さんがやつて来ました。坊さんは二人から譯を聞いて、大聲で笑ひました。そして、すぐ大きい石を拾つて来て、壺をボンと破りました。壺はめちや／＼に破れて、お酒がどぶ／＼流れ出ました。しかし男も女も尼さんも出ませんでした。坊さんは、『酒といふものは、飲まない先からでも、こんな大ごとが持ち上つて来るものです。まして、これを飲んだら、どんなにいけないかお解りになりましたでせう。』と云つて歸りました。

## 佛の組 馬鳴菩薩

馬鳴は釋尊の滅後五百年代に當つて、東印度の婆羅門の家に生れました。天資聰明で文藝に長じ、又言論が巧みであつた馬鳴は、中印度に来て沙門と對論して誰一人として敵がないことを知つて、大いに驕慢の心を起して佛教を論難し、遂には、

『諸の比丘よ。若よく我と論議し得るものあらば、その健椎を打つべし。若し能はずば、公に健椎をならし、人の供養を受くる勿れ。』と叫ぶに至りました。

それですから、國中たれも健椎をならすものはありません。この時、北印度に脇比丘なるものが居ました。彼は晩學を恥じて勇猛精進に勉學して、一晩たりとも脇をつけて臥さなかつた程勉學しましたから、何時しか人は尊びて脇比丘と呼ぶ様になりました。彼は中印度に来て健椎を打つて論議を求めたのであります。この音を聞きつけた馬鳴は直ちに馳せ來つて、脇比丘に向つて云ひました。

『世の中の如何なる難問をも、我れは克く論破する。恰も雹の芭蕉を裂く様に、若し

我れ論に負けなば、即座に舌をくひきりて汝に謝すべし。」

と、脇比丘は馬鳴のこの我執を憐み、懇ろに教へて佛道に入らしめました。

佛道に入りました馬鳴は弘く衆經を學び、明に内外に達して、その天禀の英才を傾けて佛を讃仰し、正道を歎美して一世を風化し、更に餘德を後生に被らしむる迄に至りました。特に釋尊の德行を讃仰する著述は古來其數少くありませんが、馬鳴のものした『佛所行讚』は他の追隨を許さず、傑出してゐます。

馬鳴の道聲は日に揚り、遠近競つてその化を乞ひ、國王も又甚だ尊敬してゐられました。時に勇猛、強大なる北印度健駄羅國のカニシカ王は南下して、中印度を攻め圍み、償金三億を強要しました。そうして其の應じられないのを見て三億の代りに佛の鐵鉢と馬鳴菩薩を望みました。篤信者なる中印度の王は、この二寶を失ふに忍びず頗る困惑の態でありました。これを見た馬鳴は王を慰めて、

『佛道に境界はない。弘く世を救ふにあれば、乞ふわれは自ら北印度に行き、彼地の人民にもまた、佛陀の福音を傳へん』

と言ひ、錫を健駄羅國に移して大いに道を傳へ、大莊嚴論經等を撰述して、佛日を異邦に輝かしました。

曾て馬鳴の説法の時、七疋の馬のたまぐ其處に繋がれてゐまして、涙を流して頻りに鳴いて、草を與へても更に喰べやうとも致しませんでした。これから人呼んで馬鳴菩薩と尊んだと申します。

カニシカ王も亦深く馬鳴を敬つて、

『我れに三智人あり、馬鳴菩薩、大臣マタラ、良醫シヤラ。菩薩によつて願行を行し大臣によりて亂を征し、良醫によつて體軀安し。』

と言つてゐたのを見ても馬鳴の德風の如何に高かつたかを知ることが出来るではありませんか。

### 法の組 淨飯王の死

佛陀がお悟りを開かれてから五年目、佛陀は道を説きひろめる爲め、吠舍離城（ベイスアリー）といふ所へおいでになつてゐました。すると、生れ故郷のカピラへ城から急ぎの使者が来て、

「佛陀様、大王さまは今大變な御病氣でございます。是非いま一度、息のある間に御目にかゝりたいと仰せられてゐますから、どうかお歸り下さいませう願ひいたします。」

と申しあげました。

淨飯大王さまは今年九十七のお年寄で、佛陀の修業にお出ましになつた後は、もうこの世に望ともない清い御心持におなり遊ばして、正しい生活と正しい政治とを以て此世の平和を御保ちなさることの外には、何の餘念もございませんでした。處かふとした事から病の床に臥され、だん／＼病は重り日一日とお身體の弱るのをお感じ遊

ばされた大王さまは此度は到底、全快出来ないと思はれ、その思出に今一度佛陀の御教を聞いて愈々心の落付きを得たいものと思召され、さてこのお使をばおつかはしになつたのであります。

佛陀は充分大王さまの御心をお察し遊ばされ、早速、難陀、羅喉羅のお弟子をお伴れになつて、大王さまの御病氣を、お見舞にいらつしやいました。

たくさんの親類の人々にかこまれながら、苦しんでゐられた大王さまは、枕もとにこられた佛陀と御弟子さまの神々しいお姿を一目御覧になると、嬉しさ、なつかしさ、有難さが胸にせまつて、

「おゝ、能く來れました。」

と仰しやつて、嬉しなきにおなき遊ばされました。

佛陀は、今にもおかくれになる父大王さまの額に御手を置いて、靜かに、

「大王さま！御心配なさいませぬ。今までまつすぐな道をお歩きになり、立派なことをなさつた功德で、大王様の未來はきつと麗はしいものであります。」



とお慰めいたしました。

有難い佛陀のお言葉をお聞きになると、大王さまは九十七才を一期として、安らかに  
おかくれになりました。

大王様のお葬式の時には、佛陀はお弟子たちと、棺をかついて、孝行のお手本をお  
見せになりました。大王様の棺が眞赤な火に焼けて終ふとき、親類の人々は顔をおほ  
うて泣き悲しみました。佛陀はその人々を顧み給ひ、

「皆さん、總てのものは少しの間も休むことなく移り變るのです。人の身もまことに  
もろいものでありまして、在ると思ふ間にやがて虹の様に、又夢の様に消えて終ひ  
ます。生きてゐるものは、きつと死なねばなりません。その時が来て泣いても悲し  
んでも駄目です。皆さんは早くこの道理をさとつて、悲しみも憂ひもない安らかな  
身にならねばなりません。」

としづかにお説き聞かせになりました。

大王さまのおなくなりになつた悲しみの中で、この佛陀のお話を聞いてゐた人々は  
大變に心を動かして、又々大勢のお弟子が出来ました。その中には佛陀の少年時代い  
つくしみ可愛がつて下さつたお叔母君やヤシヨダラー夫人もありました。

### 僧の組 じ ま ん

皆さんの中にはありませんが、世間には自分のことを自分で身慢してあるく人があ  
ります。自分で自分を賞めたり自慢するのは、立派な人のすることではありませんね  
自慢しないでも人から賞めて頂く様にならなければだめです。自分自身で自慢してゐ  
ると、きつと終ひには失敗するものです。今私がお話する萬兵衛さんも、自慢し  
てゐて遂に失敗した人の一人であります。若し、ひよつとして皆さんの中に自慢す  
るくせの人があつたら、どうぞ萬兵衛さんのやうに耻をかゝない前に、今から自慢し  
ない様にしようではありませんか。

萬兵衛さんは、大それた力が強い人でしたから、どこへ行つても、

「萬兵衛さんは力が強い。」とか、「萬兵衛さんはえらい。」など、云はれるものですから

だんくじまんする様になりました。そうして、しまひには人の顔さへ見ると、

「おれは力が強いぞ。どうだ力くらべをして見ないか。」

と言つて、威張り散らすやうになりました。

けれども誰も萬兵衛にかなふものもありませんから、

「いや、萬兵衛さん。とても私なんぞはそばへもよりつけません。」と相手になりませ

ん。ですから萬兵衛さんは、

「おれの力には誰もかなはないから逃げるのだ。」と益々自慢の鼻を高くする様になりました。

こんな風で、萬兵衛さんが自慢をする様になると、どうしたのか萬兵衛さんの鼻はだんだん高くなつてゆきました。

ある日、村の鎮守様で、村の若い人達の相撲がありました。力自慢の萬兵衛さんは鼻たかくぐと出かけて行つて、まつばだかになり、いきなり土俵の上へあがり、

「さあ、一べんに十人づゝ相手になつてやるから、かゝつてこい。」

と云つて、若い人たちを馬鹿にして両手をひろげました。日頃萬兵衛が力自慢をしてゐるから、今日こそひどい目にあはせてやらうと、若い人達は相談をして、力の強い若者が十人土俵にあがつて萬兵衛に組みつきました。

然し、何しろ力の強い萬兵衛のことですから、ぐるりとからだを廻すと組みついてゐた十人の若者達は皆んな、バタ／＼と土俵の外へなげ出されて終ひました。若者達はきまり悪るさうにひつこんでしまひましたが、萬兵衛は自分の胸をどんとたたいて

「萬兵衛さんの力はこんなものだ。」と威張つておいて、

「さあ、こんどは二十人一べんにかゝつて来い。」と云ひました、が誰も出ません。

「なさない奴らだ。」萬兵衛はあざわらつて、大手を振つてかへりました。

ところが、そのあくる日萬兵衛が起きて見ると、何だか顔が急に重くなつて、目の前に赤いものがあつて妙に物を見るのに邪魔になります。

「おや、どうしたのだらう。」と思ひながら手をやつて見ると、まあどうでせう。一晩の中に萬兵衛さんの鼻は二尺も高くなつてゐました。それでも萬兵衛は喜んで、

『これは、おれが餘り力が強いので神様が天ぐにしてくれたのだ。よし／＼村の奴らをこれから驚ろかしてやらう。』と朝のご飯をすますと、すぐにのこ／＼と出かけた。

村の人たちは萬兵衛の不恰好な二尺もある大きな鼻を見て、『おや／＼萬兵衛のやつとう／＼天ぐになつてしまつたよ。』と目ひき袖ひき笑ひました。その笑ひ聲が萬兵衛さんに聞えたので萬兵衛さん腹をたてました。

『何がおかしいのだ。ひねり殺すぞ。』と村の人達をにらみつけました。すると又其の鼻は一尺許りものびました。萬兵衛さんが怒れば怒るほど鼻はだん／＼大きくなつてさすがの萬兵衛さんも鼻の重みで前か／＼みになつてしまひました。

それを見た村の人達は、

『もし／＼萬兵衛さん、一たい誰におじぎをしてゐるのです。』とからかひました。さすがの萬兵衛さんも、とう／＼自慢の鼻が地面について終つては、上へ向くことさへも出来ません。たゞ、『うむ／＼／＼』となつてゐます。

『萬兵衛さん／＼其の位あやまればもう赦してあげるから、もう頭を上げるがよい。』と村の人たちが云ひましたが、どうしても頭を上げることが出来ません。もうさいせん様の様に自慢の力を出すことも出来ません。三本足の馬の様になつて歩いてゐると、そこへ向ふから一匹の犬がやつて来ました。そうして妙なものがはつてゐるのでワン／＼ほえながら萬兵衛さんに飛びつきました。萬兵衛さんはあはて、逃げ出しました。が、そのかつかうがあまりおかしいので、村の人たちは大きな聲をあげて、お腹をか／＼へてわらひましたと云ふことであります。(典據—樋口紅陽氏小學童話二學年)

## 第四章 十二月 第四日曜日

## 説話 年の終り

とうとう今年も、おしまひになりました。みなさんが今年中になすつたことを、一度よく思ひ出して御覧なさい。

お正月にはしい／＼と言つて買つて戴いた日記帳を、幾日おつけになりました？今日まで一日も缺かさないうつてをりますか。

又今年中に、学校の先生からも、お話の先生からも、いろんな面白いお話やためになるお話を聴かせて頂いたでせう。お話の筋ばかり知つてゐたつて爲方がありませんね。どうすればよいでせう！。それからお母様のお吩咐を聞かなかつたこと、お父様から叱られたことなどを、よく思ひ出してごらん。そうれ………。

もう來年は一つ大きくなるのですから、よい事をして人から褒められるやうな立派な佛の子になりませうね。では、さよなら。

## 佛法・僧合級 暮のあつまり

今日で今年の日曜学校はお終ひです。愈御正月がまいりましたね。幾歳になつても嬉しいのはお正月です。が殊に皆さんの時代は一番楽しいです。もういよいよ明日がお正月といふ大晦日の晩などは、なか／＼眠られない位だと思ひます。其の時、私達は斯ういふことを考へて見ませう。

『明日になればいよいよお年が一つ殖える、私はお年が殖えただけ賢くなつたであらうか。学校で習つたことはどれだけ記憶出来たか、お父さんやお母様に孝行であつたか、若し口返答などしなかつたか、伯父さんから頂いた日記帳も一日もかゝさずにつけたか、そうして善いこと、悪いこと、どちらが多かつたであらうか。』  
靜かに考へて見て、悪いことや不孝であつたことは自分で來年からはなほす。又自分で耻かしくない丈の勉強をする様に決心致しませう。

今年の一年をふりかへつて見ると、私達はほんとうに達者でした。時々お風邪を

ひいたりなんかしたこともあつたでせうが、かうしていま新しい年を迎へることが出来るといふのは、皆御佛様の御めぐみによるのであります。

只今から御佛様に御禮を申し上げます。そうして、不幸にも病の床にふして、今日日曜學校に來られなかつた人達の御病氣御全快と來年も又御めぐみを下さるやう、誠心から御祈りいたしませう。

(生徒静座、教師静かに祈る)

今日は皆様も御家の御手傳などせねばなりませんから、約半時間許り運動をして今日は開散いたしませう。

どうか幸福な新年をお迎へなさい。

## 第十篇 一月の分

# 第一章 一月 第一日曜日

## 説話 濱の老松

ある濱邊に年老いた一本の松の樹がありました。梢は高く雲を凌ぎ、枝は遠く波の上へ差し出てゐてたゞさへ景色のいゝ海邊に、一入の眺を添へてをりました。

ところが何としたことでせう。この夏頃から急にその色艶がなくなり、バラ／＼枯れ落ちる葉は日増しに多くなつて、濱の漁夫たちが、それ水だ。それ肥料だと、さまざまに手を盡した甲斐もなうさしも名高かつた濱の老松も今はすっかり枯はてしまひました。

まもなく大せいの人たちが、毎日濱邊へ集つて来て、枯れた松の樹をヨイサ／＼と伐りました。

『おしいわね。』『鬼ごつこの時のお宿がなくなつちやつた。』『をぢさんにお船に乗せて貰つて沖へ出た時、あの松がお家の目標だつたわ。』『さうだ、僕が濱で迷兒になつた時も、あの松をめぐつてに歸つて来たのに。』

美ちゃんと好さんとは、かう言つて樹を伐る人たちを怨めしさうにながめてをりま

した。

『あ、いゝことがあるわ。』と、美ちやんは、早くも四邊にころがつてゐるまつかさに目を附けて、『そら、これさへ蒔いてやれば屹度芽がふいて、何時かは親松のやうな大きい木になるにきまつてゐるわ。』と言つて拾ひ上げました。

濱の仕事がすつかり片附いたのは、大晦日の夕方でした。

明くれば元日、美ちやんと好さんとは、朝早く、こつそり濱邊へ出て行つて老松の根を掘りおこしたばかりの軟かい土の所へ、幾つか松の實を蒔きました。

折から、朱塗の盆のやうなお日さまが、元旦の靄をはらつてにつこり顔をお出しになりました。その光を浴びた波が静かに打ち寄せるさまは、全で黄金の薄板を碎くやう………。しかもその波の音のまに……、聞きなれた松風の音があり……聞えて來ました。

美ちやんは、ぞつと身震ひして、

『好さん、松はきつと歡んでゐてよ。』といひました。

### 佛の組 六波羅密 (二)

今日は六波羅密について御話しいたします。

波羅密と言ふ言葉は皆様が、いつも讀經してゐる般若波羅密多心經と言ふのがあ  
り、でせう。あの般若波羅密多と言ふのがこの六波羅密のことです。

先ず波羅密とは梵語のパーラミを音譯したもので、支那語に譯すと到彼岸と云ひ、  
迷ひの此の岸から悟りの安らかな彼岸に渡ることと言ひます。

其の波羅密は六つありますから六波羅密と申します。即ち六波羅密とは悟りの岸に  
渡る六つの修業であります。到彼岸と言ふのが長いから度一字で其の意味に用ひます  
それで六波羅密のことを六度とも申します。

それでは六度とは何を言ふのでせうか、

- 第一 布施
- 第二 持戒
- 第三 忍辱
- 第四 精進
- 第五 禪定

第十篇 一月の分

この六つが六度又は六波羅密と申すものであります。生死の海を無事に渡つて悟りの彼岸に往くにはこの六艘の舟が必要であります。第一の布施とは梵語ではダーナと云ひ他人に物を施すと云ふ事でありませう。この布施に財施、法施、無畏施の三種があります。財施とは財を施すことで、例へば貧しい人に金銭や物品を施し、病人に薬餌を施すと云ふ様なものを云ひます。法施とは正しき法を説き聞かせて迷を轉じて悟を聞かしむることを云ひ、無畏施とは水火盜賊等の災難に遇ふた人々に精神的の慰安を與へることを云ふのです。この布施と云ふことが實に宇宙の妙用であります。例へば動物は酸素を取りて炭素を吐き出し植物は動物の吐き出した炭素を攝取して酸素を吐き出します。この酸素を動物が吸ふのです。

施し合ひ恵み合ふこの布施が、世の中をうまく整理して行きます。

この様な布施は積極的な布施でありまして、又一面消極的には慾張らないと云ふ意味が御座います。

物を施しておいて、又何かを酬いてもらひたい等と思ふ様なのでは實際の布施とは申せません、其の様な汚い心のない布施こそ、貴い布施であらねばなりません。

### 法の組 お木盆を生んだ娘

或日のこと、佛陀が大勢の人の爲めにお説教をしてゐらつしやる處へ、チンチャと云ふ婆羅門の娘がまいりました。

そうして突然御説教の最中に立ちあがつて、『佛陀さま！あなたは立派な法を説いてゐらつしやいますか、私をこんな身にして終つて、知らない顔をしてゐらつしやるではありませんか。何時が來たら私の爲めにお産室を造つてくれるのですか。人から佛陀とも敬はれる方のなさり方とは思はれません。餘りひどいおしうちです。一たいどうしてくれるのです。』

と、大きな聲で叫びましたから、佛陀のお説教を聞いてゐた多くの人々は、この娘の言ふことを聞いて、いづれも呆れて、たゞお互に顔と顔を見合はせてをりました。



チンチャは、うまく計略が成功したわい、と圖につて、大鼓の様にふくれたお腹を、得意げに見せて廻りました。これを見た人々は不思議に思ひ、中にも信仰の薄い者は佛陀をお疑ひしたのであります。ところが、どうしたはずみか、大きな音がしたと思ふと、大きなお木盆が床の上に落ちて、こはれて終ひました。

『おや、あの娘はお木盆を生み落した。』

と、なみゐる人々は、思はず聲をあげました。

佛陀のお教へが次第に四方に弘まつて、

外道を供養する者は日々に少なくなつてきましたから、彼等は佛陀も非常に嫉みました。そうして、どうかして佛陀を公衆の面前で辱かして其の人格を傷けたい。そうすれば佛陀を供養する者がなくなるであらうと考へついたのであります。然しながら今や佛陀の御名聲は旭の昇る様な勢であるに反し、彼等外道は誠に螢火ほどの力もありません。堂々と議論をしても、到底佛陀に勝つ見込はない、却つて自分等の褻を出す恐れがあります。

卑怯な彼等外道は、遂にチンチャを利用して佛陀のお徳を傷けることゝなりました。外道にそのかされたウス馬鹿なチンチャは、不心得にもこの有難いお説教の最中に佛陀のお教を邪魔しやうとしたのであります。けれども悪いたくらみが成功すべき筈がありません。偶々お腹に結びつけてゐたお盆が脚下に落ちたので、遂々化の皮が現はれて、チンチャは國の外へ追出されて終ひました。

佛陀が自分でおひらきになつた尊い道を、總ての人々にお弘めになられるのを、いつも外道たちは邪魔をしました。然しこのチンチャで失敗したやうにいつでも失敗して、其の度毎に彼等は益々信者を失ひ、其の反對に佛陀は愈々慕はれ、其の光は遠く四方に及ぶやうになりました。

### 僧の組 うづらの話

世の中に協同一致の力程強いものはありません。日本があの大らかなロシアと戦つてよく勝利を得たのも、實に日本の國民が協同一致して御國のために戦つたからであり

ます。どんなに弱いものも集まれば強くなりますが又、いくら強いものも分ければ弱くなつて終ひます。ですから私共が互に力を協せて仲よく一つとなつて働くなればどんな大事業でもなしとげることが出来るものであります。

明治天皇は

もろともに助けかはしてむつびあふ

友ぞ世にたつ力なりけり。

と御詠じになつてあります。今日はこのことについて面白い御話しを御紹介致します。

昔、印度の或國の深い森の中で、数千羽の鶉の王となつて住んでゐられました。その頃この國に鶉を捕つて暮してゐる一人の獵師が居りまして、いつもこの森に来ては餌をまき、木陰にかくれて鶉の鳴き聲を真似てたくさんの鶉を誘ひ出します。そして鶉が吾れ先きにと争つて獵師のまいた餌を食べてゐるのを見すまして、上から用意の網をなげかけて、一氣にたくさんの鶉を捕つては市場に賣つて渡世をしてゐまし

た。

或日、鶉の王はたくさんの鶉を一所に呼び集めて、

『毎日のやうに吾々の仲間はあの獵師の爲めに殺されてゐる。かくては吾々の仲間は遠からず一人残らず殺されて終ふであらう。それで私は一つの工夫を考へ出した。若しお前達が皆んなで私の言ふ通りに行へば、誰れもが獵師に殺されないと云ふ妙案だ。それは、あの獵師が網を頭からかぶせた時、お前達は自分の頭を網の目に入れた儘、一二三の懸聲で皆んなが一しよに網をかついで飛び上り、安全な場所へ逃げ去り、かぶつた網は何處かへ捨て、仕舞ふと云ふのだ。』

と云ひわたしました。これを聞いた鶉達は大喜びで、皆んな一致して其の通りすることゝなりました。

その様な約束が鶉の方は出来たとは知らない獵師は、翌る朝、いつもの様にやつて来て彼等の頭の上に網をうちました。この時多くの鶉達は昨日教へられた通り、一二

三で一しよに網をかついだ儘大きな木の上へ一羽のこらす逃げ去つたのであります。鶉には逃げられるし網まで持つて行かれた獵師は手持無沙汰で歸りました。そして翌日も其の次の日も獵師は來ましたが、鶉は同じ方法で逃げるので、いつも獲物なしで歸るのでした。

すると獵師の妻は夫に向つて、

『あなたは毎日一羽の獲物も持つて歸らないで、いつも網をなくして歸るのはどうしたのですか。』と尋ねました。獵師は、

『毎日獲物なしで歸るのは、全く鶉が一致して網をかついで行つてしまふからだ。然しナーに心配することはない。今に彼等は内輪もめが起るに違ひない。その時こそは澤山の鶉を捕つて歸るから、まあ一瞥く見てゐてくれ。』と云ひました。

獵師がこんな話を妻と話してから間もない或日、とうとう内輪けんかを始めました。彼等が餌を探しに飛びおりた時、一羽の鶉が他の鶉の頭を過つて踏みつけたのです。すると踏まれた鶉は、

『あいた、誰だい、おれの頭を踏んだ奴は。』と大聲で怒りました。踏んだ鶉は、

『まあ左様怒るな、別に私はわざと君の頭を踏んだわけでないのだ。まあ許して呉れ給へ。』とあやまりましたが、一方はなかく承知しません。はては蹴り合ひをはじめ、これに他の鶉達が両方に思ひ思ひに味方して争をはじめました。鶉の王はいろく注意しましたが一向彼等が聞き入れませんから、もうこんなたのみにならぬ者と一しよに居れば、一緒に殺されて終はねばならぬ。長居は無用とばかりに鶉の王は自分にしたがふ家來だけをつれて其處を飛び去りました。あとでは數千の鶉が入り亂れて戦争の眞最中です。

そこへ何時もの獵師が來ました。そうしてこの有様を見て、

『鶉の奴め、案にたがはずけんかを始めた。』と新しい網をすばやく取り出して、入り亂れて蹴り合つてゐる鶉の上に着ました。不意にうたれた網だし、殊に一致をかいでゐますから、とうとう獵師の獲物となつて殺されてしまひました。

これは協同一致と云ふことを忘れたからであります。協同一致をしてゆく爲には、

私共は常に總ての人と仲よくせねばなりません。弟は兄を敬ひ兄は弟を可愛がり、年長者は年少者をいたはり、年少者は年長者の言葉をまもつて行き、少しの過ちなどをとゞして争つたりせず、互に教へ導き助け合つて、立派な人とならねばなりません。

## 第二章 一月 第二日曜日

### 説話 羽子

ひとめ ふため みやかし よめご

豊ちやんのついてゐた羽根が、お寺の屋根へ止まりました。

豊ちやんは泣きました。

するとそこへ、鳩ポツポがやつて来て、

『取つてあげませうか。』と言ひました。

豊ちやんは合點合點をしました。

ところが鳩ポツポは、

『豆さんをくれないと、いや〜。』と言つて短かい頸を振りました。

豊ちやんは、いそいでおうちへ歸つて、お鍋に『豆さんの袋を下ろして頂戴。』と言ひました。

お鍋は、  
『お菓子をくれないと、いや〜。』と言ひました。

豊ちやんは、戸棚を開けてお菓子を出さうとすると、鼠が、『お菓子が欲しいけりや、玉ちやんを捨て、下さい。』と言ひました。豊ちやんは、玉ちやんが好きですから、捨てるのはいやだと言ひますと、鼠はお菓子の上にちよんと坐つて動きません。

豊ちやんは泣きました。すると、お鍋が吃驚して、豆さんを下ろしてくれました。豊ちやんは、豆さんを持つて行つて、鳩ポツポにやりました。鳩ポツポは喜んで、羽根を取つてくれました。いつやの むさし ななやの やつし このや とや ひやふ

### 佛の組 六波羅密 (つゞき)

前の日曜日には六波羅密の種類並に布施について御話いたしました。今日は先づ持戒について申します。梵語ではシーラと申します。持戒と云ふと規則を正確に守ることで國に在つては國法を一つの會にあつては會則

を正しく守る事でありませす。佛教にあつては身と口と意の非を防ぎ惡を止むる即ち戒律を守り自己の操行を正しくすると云ふのであります。

忍辱とは梵語でクサーンテイといひ腹を立てぬと云ふ事でありませす。例へば、或人が自分を苦しめ辱めることがあつても克く耐へしひのび、復讐などの心を起したり瞋恚の心を懐いたりなどしない、之が忍辱であります。

精進とはヴァーリヤと云ひ、一言に云へば勉強すると云ふ事で、身に善行を修しつゝ正しき道に向つてよしや百難が横はるとも、只一條に不撓不屈の精神を以てまつしぐらにつき進み勉勵努力すると云ふ事でありませす。

禪定とは梵語でデアーナと云ひ漢譯では靜慮とも申します。心を外物のために亂れぬ様に定めて靜思熟慮して我が心を宇宙の眞理に安住さすこと即ち精神統一と云ふこととであります。此の精神統一の方法は即ち座禪であります。

智慧とは梵語でプラチニヤーと云ひ意味は能く物の道理を了解して迷はないこととす。この智慧に實智と權智の二つがあります。宇宙の眞理をきはめるのが實智で善惡

正邪を明察するのが権智です。

以上の六つの舟が揃はねば彼岸に渡ることは出来ません。其の中でも最も大切なものは智慧です。

此の智慧の働きが完全でないならば他の五つの働きも却つて益にならないのみか害になることが多いのであります。

例へば布施するにしても智慧を働かしてしないことには、何んでもかでも物乞ひさえ来れば可愛想な等と思つて物を施してやると云ふ様では、達者な男でも勞働するよるか樂なと云ふのでわざと腕を折つたり、チンパの眞似をして働かないと云ふ様な不了簡者が出来て来ます。智慧のない持戒は無駄な持戒であります。夏の灼熱たる中に綿入をきたり、冬の身を切る寒さの中に單衣をきてきばつてゐる様なもので何の効果もありません。忍辱でも智慧の伴はないでは、身を亡し國を亡ぼし教を亡します。印度の僧侶が充分智慧がなかつたので佛教も今日印度では哀へてゐるのです。精進でも同様で無茶に勉強して身體をこはしたり等する様なもので智慧の働きのないものは役

に立ちません。禪定がいくらよいと云つても朝から晩まで毎日〳〵禪定をしてゐたのでは、人を救ふことも出来なければ國家も立つて行きません。遂には亡びて終はねばなりません。

かう云ふ様に智慧が最も大切なものであります。

### 法の組 提婆の悪いたくらみ

佛陀は、御悟りをお開きになつてから、三十七年目の年、橋賞彌城へお行になつて、多くの人々に御説法を遊ばされました。御説法を聞いた人々は、佛陀と舍利弗目連、阿那律、阿難等を厚く供養したのであります。けれども提婆達多ひとりだけは何時もそんな供養にあづかることが出来ませんでした。そこで提婆は思ひました。

『私は佛陀の従弟であるのみならず、學行に於ても、舍利弗や目連に決して劣らない。それなのに、誰一人として私を供養する者が無い。あゝ、つまらない。私にはこんな馬鹿らしい土地では、もう一日だつて居る氣はしない。』

と、その儘、佛陀に別れて橋賞彌城をあとに、王舎城へ歸りました。

王舎城へ歸つた提婆は、自分が佛陀の代りにならうと云ふ野心を起して、誰か有力な後援者を得ようと、種々物色の結果、遂に王舎城の太子阿闍世(アジャタサツウ)を旨く味方に引入れたのであります。阿闍世太子のお供養を受ける様になつた提婆はおごりの心が出て来て、愈々佛陀の代りになる日が來たのだと、佛陀の御許にまいりました。そうして、

『佛陀はもお年を召されましたから、私が今から佛陀に代つて、諸弟子のために法を説きたいと思ひます。』

とお願ひいたしました。彼はいばりたうて仕方がないので、すると佛陀は、

『提婆よ、私は舍利弗や目連のやうな大弟子にさへ、まだ諸弟子の教育を委してゐない。それに、どうして汝の様な修養の足りないものに、大切な弟子を委されやう』と、一言の下に拒絶遊ばされました。大勢の目の前で、舍利弗や目連をほめて、自分にはあべこべにお叱りを受けたので、提婆は非常に面目を失ひ、いつかは復讐をしよう

と、此時に決心したのであります。そうして佛陀の御許を逃出した彼は、伽耶山に赴き、其處で佛陀に反對して自分の宗派を作りました。

然し、佛陀の御徳が非常に高いので、なか／＼自分の思ふ様に威張れない。そこで提婆は或日阿闍世の許へまいりまして、

『太子さま、今太子さまが御位におつきになれば世界の王となることの出來ます。然し父王がなくなられてから御位につくのでは、おそくなつて終ひます。一日も早く御位におつきなさいませ。そうすれば太子は新しい王、私は新しい佛、この二人が共に起てば必ず、世界を治めることはいと易いことであります。なんと愉快ではありませんか。』

と、太子にすゝめました。うまくだまされた太子は、あらうことか遂に父大王様を七重の獄裡に入れて、とう／＼餓死をさせて、自分が新しい王舎城主となられました。提婆が愈々悪いたくらみをするのでありますが、それは次の日曜にお話いたしませう。

皆さん、こんな悪いことが、何時までも、失敗せずに続くものでせうか。

### 僧の組 生きものを愛せ

私共は生き物を可愛がらねばなりません。どんな生き物でも、みんな御佛様の御めぐみをうけて育つて行つてゐるのです。私共が他人から可愛がられた時嬉しい様に、どの生き物も可愛がられて喜ばないものは一つとしてありません。然し若しも皆さんが人からいじめられたならば悲しい様に、生きものもいじめられるとひとり泣いてゐるのです。弱い生き物をあはれみ可愛がつてこそはじめて萬物の靈長とも云はるゝ人間のねうちがあるのです。

只今からしばらくの間、優しい花子さんの美しい行ひをお話しして、皆様の御手本にして戴きたいと思ひます。

或朝花子さんが學校へ行くみちばたで、一匹の子猫がすぶぬれになつて、ブルブルとふるへながら悲しそうに鳴いてゐるのを見ました。花子さんは思はず、

『まあ可愛そうに！子猫さんどうしたの。』と、子猫の傍へ近よつて言葉をかけると、子猫は花子さんの方へよつて来て、

『にやあ、にやあ。』  
と一そう悲しい聲でなきました。

花子さんは子猫の頭をなで、やりたかつたが、男の子に溝の中へでも落しこまれたのか汚い水にぬれてゐますから、なで、やる事が出来ません。

『可愛そうにねえ。私助けてあげるわ。』と言つて、附近に落ちてゐた古新聞を拾つて、それで包む様にして抱かうとしましたが、ふと學校のことを考へ出しました。

『さう、子猫さん、私今助けてあげたいのだけど、學校がおそくなるから、私が學校から歸るまで、このあたりで待つてゐらつしやいねえ。いゝでせう。』

といつて花子さんがあるき出すと、子猫はヨチ／＼と優しい花子さんのあとを、ついて來るのでした。

『子猫さん、ついて來てもだめよ。歸るまで待つてゐらつしやい。』



花子さんはさう云つて、可愛想な子猫のことを心配しながら學校へ急いで行きました。學校へ行つてからも花子さんは

『子猫はどうしたでせう。私の歸るまであのあたりに居ればよいが。』

と絶えず子猫のことが頭に浮んで來てなりません。お晝になつて、お辨當をたべる時にも、

『あの子猫はきつとお腹がすいてゐるだらう。この卵焼きをたべないで置いて、あの子猫にたべさせませう。』

と、優しい花子さんは、折角お母様が入れて下さつた好きな卵焼きもたべないで残して置きました。

それから二時間體操とお唱歌がありました。ひげのかねがなるとすぐ、いつもならばお友達と一緒に話しをし合つて歸るのですが、今日は誰れよりも先に學校の門を出て、朝、子猫のゐた處へ走つて來ました。

すると子猫の姿が見えなければ、にやあく／＼となく聲も聞えませんが。

『おや、子猫さんは何處へいつたのでせう。』

花子さんは一生けんめいあちらこちらと見廻してゐると、道ばたの大きな石の蔭に子猫はねてゐました。花子さんは急いで行つて、

『まあ、子猫さん、こんな所にゐたの。』

と花子さんが嬉しげに言ひました。しかし、よく／＼見ると寒さに凍へたのか、それとも誰れかにいじめられたのか、可愛想に子猫は死んで終つてゐるではありませんか

『まあ子猫さん。』

と云つたきり、花子さんは子猫の死骸をじつと見つめたまゝ立つてゐましたが、目からは涙がポロ／＼と流れました。しばらくして、

『子猫さん、かんにんして頂戴ね。あの時私が助けておけば、こんなめにあはなかつたでせうにねえ。』

花子さんは、もう汚ないのも何も忘れて、いきなり子猫の死骸を両手で抱いて、自分のおうちへ駈けて歸りました。そうしてお母様に御願ひして、お庭の隅に丁寧に

うづめて、きれいな花をたむけてやりました。

皆さん！子猫は今でも冷い土の下で、温かい花子さんの優しい心に御禮をいひながら、花子さんの幸ひをいのりつゝ静かに眠つてゐることです。

けれども花子さんの心には、

『あの時、なせすぐに助けなかつたらう。』と云ふことが残つてゐて、どうしても忘れられませんでした。

### 第三章 一月 第三日曜日

#### 説話 奴さん

奴さんがなせ風になつたんだか、まさか御存じはあるまいと思ひます。

『そうらお殿様のお通りだ、下にゐろ、下にゐろ！』と誰かが言ひました。

町を歩いてゐたお爺さんもお婆さんも、男も女も子供も犬も猫も杓子も、みんな平蜘蛛のやうに路の兩側にへたばりました。

するとその前を幾人も幾人もおなじ風をした土が大手を振つて通りました。中には『したアに、したアに』といつて大きいさゝらのやうなものを引ずつて行く人もありました。

奴の駒さんは、槍投げの名人でした。駒さん投つた毛槍はそれ／＼は高くまで揚ります。そしてそれが落ちて来ると、駒さんは、まるで鞠かなんかをうけるやうに、ひよいと取つて一度も落したことがありませんでした。それもその筈、駒さんがこゝまで腕を鍛へるには並大ていの苦勞ではありませんでした。駒さんは毎朝夜明け前から

起きてうらの廣つばへ出かけて行きました。そして毛槍の代りに箒を持って『ヒースー』といつて高く投げ上げました。何しろ薄暗い時分ですから、時によると頭の上へコツンと落ちて来ることもありました。お内儀さんが、朝お掃除をしやうすると箒が見えませんか。大騒ぎをして捜してゐると、うらの廣つばで『ヒースー』といふ聲がします。何だらうと思つて行つて見ると、駒さんが箒を投つてゐます。『まあいやだねえ、この人は』といつて頭をボカリ……

駒さんは、よそのお嫁さんが子供を抱いてゐるのを見ると、すぐそばへ寄つて、『まあ好いお子さんですね、どれ小父さんが抱つこをしてあげませう』といつて、赤ん坊を受けとつてすぐ『ヒースー』といつて空へ投げ上げました。赤ん坊はぎやア／＼いつて落ちて来るのを、ひよい／＼うけて『なか／＼よくあがりませうね』といつてお嫁さんに返しました。お嫁さんは火のやうに怒つて駒さんの横面をビツシヤリ……

その時分、駒さんは頭に瘤の三つや四つはないことはありませんでした。かうして駒さんはとう／＼槍投げの名人になりました。

今日はお殿様が新年の御挨拶に御本家へお越しになるといふのでとりわけ嚴めしい行列でした。駒さんの持つてゐる毛槍はお家傳來の寶物で、お殿様の何よりも大切にされてゐらつしやるものでした。

駒さんはこんな大切なものを持つたのですから大そう得意になつてをりました。

ちようと町の角の所に、駒さんのお内儀さんが子供を連れて行列を拜みに来てゐました。お内儀さんは駒さんの姿が見えると、もう狂氣のやうになつて、

『あれが内の人ですよ、そして持つてゐる毛槍はお殿様の御大切な寶物なんですとさ』と、誰かれなしに言ひふらしました。

まもなく駒さんはその前を得意になつて通りました。すると子供が『やあ、父つあんだ、偉いな偉いな』といひました。駒さんは自分のお内儀さんや子供や近所の人が見てゐるのに氣が付いて、こゝぞと思つて力一ぱい毛槍を投げ上げました。すると毛槍はビューンと鳴つて矢のやうに早く空へ揚りました。

『まあ、揚つた揚つた』といつて子供は手を叩いて喜びました。駒さんいよ／＼調子附いて槍の落ちて来るのを待つてゐましたが、どういふものか毛槍はまだすん／＼揚つて行く容子です。駒さんは心配さうな顔つきをして、

『どうしたんだらう、馬鹿に高く揚つちやつた、』といつて空をながめてゐましたが、槍はもう見えない位小さくなつて、とう／＼雲の中へ入つてしまひました。

大變なことになつたといつて、みんなの人が騒ぎ出しました。そしてこのことがすぐ駕籠の中においでになる御殿様のお耳へ入りました。

お殿様は大さう御立腹になつて、駒さんをお喚び付けになりました。駒さんは眞つ青な顔をしてお殿様の御前へ出ました。

『お前の不心得からお家に傳はる寶物がなくなつてしまつた。』  
お殿様はふるへ聲でかう仰やいました。

駒さんの申譯のしやうがないので黙つて泣いてゐました。

駒さんは其晩おそく、しよんばりお家へ歸つて來ました。そして御飯も食べないで、

『空へ行きたい、空へ行きたい』といひつゝ泣いてゐました。

翌る朝、駒さんは眞つ白な着物と着換へて、腹を切つて死んでゐました。

可愛想に駒さんは、お殿様へ死んでお詫びをしたのです。

ところがその晩、みんなが寐しづまつた時分『空へ行きたい、空へ行きたい』といふ聲がしました。お内儀さんは、ぞつとして蒲團を引つかぶりました。その次の晩も同じ時刻に『空へ行きたい、空へ行きたい。』と云ふ聲がしました。すると子供が『やア、お父つあんが來たよ』といつて起きました。お内儀さんは『いゝゑ、お父つあんは死んでしまつたのですよ。だからあいたくつてももう逢へないの』といつて子供を抱きよせて泣きました。

翌る朝、お内儀さんは畫工に頼んで駒さんの繪姿を描いて貰ひました。そしてそれに竹の骨を付けて風を拵へました。

『いゝんだね、僕に頂戴よ、ね、ね、お母さん、』といつて、子供はその風を貰つてすぐうらの廣つばで揚げました。

奴さんを描いた風は、すん／＼揚つて行つて見えない位に小さくなりました。

恰度その時、お殿さまのお邸のお庭へガタンといふ大きい音がしました。家來は何だらうと思つて出て見ますと、お家の寶物の毛槍が落ちてゐました。家來は屹驚してこのことをお殿様に申しあげました。

お殿様は大さうお喜びになつて、すぐ駒さんの家へ使をお遣はしになつて、毛槍が戻つたから安心しろと仰やいました。

お内儀さんは使の人から、ちやうど風を揚げてゐた時刻に毛槍が空から落ちて來た話を聞いて、身の毛がよだつほどびつくりしました。そして駒さんの死んだことや、夜中に空へ行きたいと云ふ聲のしたこと、繪姿を描いた風を空へ揚げたことなどを残らず咄しました。

『ですから、これはきつと主人の一心が風に乗りうつつて槍を取り返へしに行つたのに違ひありません、』と申しました。

お殿様の使の者から一伍一什の事をお聞きになつて、駒さんの死んだ事を大さう氣の毒にお思ひなさいました。が、いま更死んだ駒さんを生かす譯にも行きません。それでせめて駒さんの一心の乗りうつつたといふ奴風を拵へさせて、大せいの子供達に遣つて、喜こばせてやろうではないかといつて紙風をたくさんお拵へさせになりました。奴さんを描いた風はその年のお正月から揚りはじめたのです。